平成28年12月1日発行第13巻第6号通巻104号

2D DREAM MAGAZINE cover illustration by 孫陽州

二次元ドリームマガジン

2016 12 Volume.91 DIGITAL EDITION

18 未満

カラーピンナップ
うるし原智志
竜胆／孫陽州

【カラー＋モノクロ計38ページ】
野晒惺

H漫画&4コマ漫画
ぱふぇ
時丸佳久
ジンナイ
雛瀬あや
嘉納あいら

【特別読み切り】
ミルフィーユ新作を最速ノベライズ
粘獄のリーゼ
黒井弘騎×楠木りん

【最終回】
魔を祓う神巫
宮道京香の寝取られ退魔帖
ぽいぽい×みやねあき

連載&読み切り小説
酒井仁×桐島サトシ
冬野ひつじ×sasana
千夜詠×ねむ
蒼井村正×薄稀
火村龍×てんけん
でぃふぃーと×スウィッチ01

試し読み版

今号の Special Fetishism Series 特集
変身ロイン
純粋なる少女は正義に目覚めやがて敗北の魔悦に染まる!

少女に宿る
高潔な正義の意志は、
アナルを犯す淫熱に蕩け堕ちる！

鋼拳少女エルフレイア
辱獄の罠

小説 NOVEL／狩野景（かりのけい）
挿絵 ILLUSTRATION／孫陽州（そんようしゅう）

鉄錆と機械油の匂いがこびりついた廃工場。
手掛かりを元にようやく探し当てた敵のアジトに鋼拳の女戦士エルフレイアは単身で踏み込んだ。
「出てこい、卑怯者。ここに潜んでいるのはわかっている。絵里子と真由美をいますぐに解放しろ！」
クラスメイトを人質に取られた。わざとらしく残された手掛かりも、ここにおびき寄せるための罠だろう。それを知りながら堂々と正面から乗り込み、凜とした声を張り上げる。
「グゲゲ、来たなエルフレイア。我々の野望を阻む邪魔な牝猫め」
不快な声で笑いながら現れた巨体が、粘りつくような視線をコスチューム姿の少女に注ぐ。
赤みがかった長い髪をツインテールにまとめ、その頭部に猫耳を思わせるヘッドセットを装着する。
黒いタイツの両脚に特殊素材のブーツを履き、両手にも同素材のグラブをつけて徒手空拳の戦闘力を最大限に補佐する。
機動性を重視されたレオタード状の戦闘スーツは、身体のラインを魅惑的に浮き立たせる。
鍛え上げられた躍動感に溢れる戦士の肉体に、撓わな乳房がムッチリとした肉感を誇示して熟れ膨らむ。細く括れた腰と対象的に、肉付きの良い尻がキュッと形良く引き締まる。
その膨らみに引っ張られる形で股間への布地の食い込みが強くなって、こんもり膨らんだ恥骨の形をくっきりと浮き立たせていた。
（こいつらも人の身体をイヤラシい目でッ！）
猪のような怪人とその周りを取り巻く戦闘員が、舐め回すような視線を注いできているのがわかる。
敵と戦うときはいつも不愉快な気分にさせられるが、このコスチュームが力を最大限に引き出せるのだから仕方ない。
「悪の組織ゲルバルトンの愚劣な怪人め。私の大切な友人をいますぐに引き渡せ。逆らうというのなら、貴様ら全員、討ち倒す!!」
視線にさらされる不快感を怒りに変える。炎の力を瞳に灯し、凜とした美貌に闘気を漲らせた。
「残念だったな、大切なお友達はここにはいねえぜ。いま、真のアジトでお楽しみの最中だぜっ」
『助けてぇっ！　ここから出してぇえええっ、はうっ、あ、ああ、そんなの、もう入れないでっ』
『あぁあああっ、触らないでっ、き、気持ち悪い、もう、家に帰らせてっ。いやぁあああっ』
片隅に積み上げられた壊れかけのモニターに、友人たちが不潔な牢獄で陵辱される姿が映し出された。
「ああっ、絵里子、真由美ッ。二人をどこにやった？　いますぐあんなことをやめさせろっ！」
戦闘員たちに身体をまさぐられて、前後の穴にペニスを突き込まれている。もう何度も犯されたらしく、白濁した汁が全身を汚していた。
「早く助けてやらねえと、あいつらぶっ壊れちまうぜ。なにしろアジトの戦闘員から怪人まで全員を相手にしなくちゃならねえんだからな」
ゲッゲッゲと笑う猪怪人に合わせて、周りを取り巻く戦闘員たちまでキーキーと甲高い声を上げる。
「下衆どもめっ！　彼女たちがここにいないのなら、もうお前たちに用はないっ」
飛び出そうとした瞬間、低い唸りを発して高出力のエネルギーが廃工場を包み込んだ。
「建物全体にエネルギー・シールドを張らせてもらった。いくらエルフレイアでも、簡単には突破できねえぜ」
「ならば貴様らを一匹残らず叩きのめして解除させるまでだ。友人たちの居場所も吐いてもらうぞ」
絵里子も真由美も酷い目にあわされている。一刻を争う事態なので無駄な戦いは後回しにしたかったけれど、仕方がない。
「炎の精霊サラマンディーヌよ、私に正義の祝福と浄化の熱拳をっ。はぁあああっ！」
身の内に宿る炎の精霊に熱い思いを告げると、燃え上がるような無敵の力が湧き起こる。
「いくぞっ、ゲルバルトンの手先どもっ！　人々を脅かす貴様らの野望、炎の鋼拳エルフレイアが決して許しはしないっ」
火炎の力を全身に纏わせ、エルフレイアが戦いの構えを取った。
「生意気な牝猫に身の程を思い知らせてやれっ」
「ギィイイイッ!!」
猪怪人が命じると、黒タイツに身を包んだ戦闘員たちが一斉に襲いかかってきた。
「邪魔だっ、はああっ！　せいっ!!」
精霊の力で強化された身体に、雑魚どもが敵うはずがない。
食い込み気味の際どい股間を惜しげもなく開脚させて鋭い蹴りが繰り出される度、ひょろ長い身体つきの男たちが、もんどり打って吹っ飛ぶ。
「食らえ、バーニング・ナックルッ」
大きく脚を踏み出しながらパンチを繰り出すと、張りのある撓わな膨らみが大胆に弾んで、レオタードの薄い布地を引き千切りそうなほど踊り狂う。
もちろん強化素材で作られたコスチュームがその程度で破れるわけがなく、柔らかな質感と美麗な形をそのまま映し出して膨らみを包み込む。
放った拳が目映く白熱し、敵を火だるまにした。
「弱いくせに数ばかりうじゃうじゃと。まとめて焼き尽くしてやる。ジャッジメント・フレイムッ」
一体ずつ倒していたらきりがない。
両腕を左右に大きく振り切ると、その勢いで二つの豊かな膨らみも勢いよく左右に分かれ、その反動で今度はぶつかり合って艶めかしくひしゃげる。
白熱した両手から全方向へと広がった精霊の力が、

著者近況　『シン・ゴジラ』でMX4Dを初体験しました。激しく揺さぶられたり突き上げられたりも凄かったけれど、水飛沫を顔射されまくってびちょびちょにされたのがたまりませんでした。なんだか病みつきになりそうです。

エルフレイアを取り囲む戦闘員たちを一気に燃え上がらせた。
「雑魚はすべて片づけた。次はお前の番だ怪人！」
焦るあまり、一気に力を使いすぎたかもしれない。けれども陵辱を受けている友人たちを思うと、力を温存なんかしていられない。
「グゲゲゲ、噂以上の強さだな、エルフレイア。だがこのガステロル様が貴様をぐはぁああっ」
怪人のもったいぶった名乗りと挑発なんか呑気に聞いている暇はない。
でっぷり太った毒々しい青色の巨体の間近まで一瞬で踏み込むと、エルフレイアは醜い顔面目掛けて拳を叩き込んだ。
「貴様、いきなり攻撃を、がふっ。こういう場合は話を最後まで聞くのが暗黙の了解、ぐはっ。ちょ、ちょっと待……ごぁああっ」
さすが怪人は戦闘員と違ってかなりタフだ。
不意打ちで何発か食らってもよろけるだけのガステロルに連打の勢いを増して拳と蹴りを叩き込む。
「ファイナル・バーニング・ストライクッ！」
数十発くらい攻撃を叩き込んだらようやく、ぐったりと尻餅をついたガステロルに、必殺技を放った。
「グガガガガァァァッ」
本来なら十分に痛めつけた敵にとどめをさす技だ。
モーションが派手で避けられやすいうえに、威力に比例して大きな力を必要なのでタメに時間が掛かる。
スピードを重視して半分にも満たない威力で、確実に当てるため間近で放った。
それでも十分な効果はあったはずだ。
「さあ、本当のアジトの場所を白状してもらうぞ。それとここのエネルギー・シールドを解除しろ」
灼熱の衝撃波を浴びて焼け焦げたガステロルの、でっぷり太った腹を踏みつけて命じる。
「ぐぅ……、いきなり決め技を使ってくるとはな。驚いたぜ……。しかし大技を続けざまに使って、消耗が激しいんじゃねえか？　足元がふらついてるぜ」
「ふん、負け惜しみを。もう一発、今度は全力で食らいたくなかったら、早く人質の居場所を教えろ」
確かに息切れしているし、ファイナル・バーニング・ストライクをもう一度放つのは無理だけど、そんな素振りは一切見せずガステロルを脅す。
「無理するな顔色が悪いぞ。それにずいぶん汗だくじゃねえか。そんなざまでこれ以上戦えるのか？」
しかし怪人はエルフレイアを嘲笑いながら、身を起こしてきた。
「なんだと？　うわっ」
パワーを一気に消耗したといっても、全力疾走で限界まで走りきったようなものだ。少し間を置けば回復してすぐに戦える。なのに、踏みつけていた足を払いのけられ、転びそうになってしまった。
（なんだ？　身体が妙に……怠い。疲れがいつまでも治まらない……それどころか……）
足の踏ん張りが利かず、握る拳にも力が入らなくなっていた。
「戦闘員相手にはりきって、息が切れたか。タップリ吸い込んでくれたようだな。俺様の体臭を」
「この腐ったような甘い匂い、毒ガスか⁉」
廃工場に最初からあった匂いだと思っていたので、完全に油断していた。
「気がつくのが遅すぎたな。もっと存分に嗅ぎやがれっ。フンッ」
ブッシュウウウッ！
「げほっ、がはっ、あ、あああぁ、身体がぁ……」
ガステロルの全身至る所に穴がいくつも開いて、匂いを濃厚にしたガスがエルフレイアへ吹き掛けられた。全身から、力が抜け落ちて立っているだけで精一杯になる。
「ほら、もうふらふらでいまにも倒れそうじゃねえか。俺様は親切だからな、優しく支えてやるぜ」
密閉された廃工場の中に怪人の毒ガスが充満して、エルフレイアの肺を汚染し尽くした。
気力だけで辛うじて立っているエルフレイアを太い指でガッシリと掴みながら怪人が嘲笑う。
その全身に開いた穴から、身体の色をさらに毒々しくしたような青い触手が這い出てきた。
「気色の悪いものをっ。は、放せっ」
蠢きながら迫ってくる肉蔓から逃げようとする。
しかし軽く掴まれているだけなのに、ガステロルの手を払い退けられない。
「くううっ、あぁああぁ……‼　やめ……ろおっ」
脱力させられたエルフレイアの身体に、無数の触手が絡みついた。
「汚らしいものをくっつけるなぁっ。おぁぁっ」
柔らかさと硬さを兼ね揃えた奇妙な弾力感が、くねりながら這い回る。
（この触手、生暖かい……、それにずっとピクンピクン脈打ってて、気持ち悪い）
本能的な嫌悪を刺激してくる感触に、頭がおかしくなりそうだ。
（それにこの汁……。ヌルヌルして、変な匂いする……あぁ、身体中に。こんな、汚らしいものをっ）
触手からジュクジュクと滲み続けている分泌液が、蠢き回る度に塗りたくられた。
穴から噴き出した毒ガスと同じ成分らしい。その液が染み込むと、エルフレイアの身体がますます脱力感に蝕まれる。
「グゲゲゲ、どうだ気に入ったか、俺様の触手は。これまで我々を苦しめてくれた礼を込めて、汁増量で奉仕してやってるんだぜ」
すでに怪人は彼女の身体から手を放している。
だが全身に絡みついた触手が、エルフレイアの身

著者近刊　『わたしのおっぱい育ててよ！　幼馴染みとお嬢様の育乳バトル』『目覚めると拳銃乙女を護る美少女拳士になっていた』『イチャラブ痴漢電車　間違えて乗った女性専用車両は痴漢OK!?』ほか　好評発売中！

粘獄のリーゼ
aperitif
小説／NOVEL 黒井弘騎（くろいひろき）
挿絵／ILLUSTRATION 楠木りん（くすのき）
リーゼと光流が粘獄に悶絶する書き下ろしの特別読切小説!!

「はぁっ……最悪！　もう最悪よ！」
「そ、それは……遺憾ながら、わたくしも同意致しますわ……っく、ふぅ！」
光届かぬ闇の底――今は訪れる者もいない、廃棄された地下水道の最深部。不快な湿気と瘴気が蔓延し、腐り果てた下水が蠢く不浄の地は、今や様々な魔物の棲家と成り果てている。
曰く、村外れに存在する旧時代の遺跡から溢れ出した廃液により、この地と水源は汚染され、このような異界へと成り果ててしまったのだという。
だが、そんなおぞましき地下水道に、自ら足を踏み入れる者たちがいた。
「くっ……も、もう！　本当……何から何まで、最悪の場所ね！」
忌々しげに悪態をつくのは、修道服に身を包んだ美しきシスター。だが神の愛を説く聖職者としては、その風体は蠱惑的に過ぎた。
まず目を引くのは、あまりにも肉感的なボディスタイルだ。むっちりと肉感的な太ももや、生意気盛りに媚肉を実らせた巨乳と豊臀からは、聖職に求められる慎ましさなど微塵も感じられない。熟れに熟れた牝肉は過剰なセックスアピールを見せつけながらも、すらりと伸びた長身はスタイル抜群で、牝豹のような精悍ささえ感じさせる。
そんな蠱惑的すぎるグラマラスボディを包むのは、媚肉の魅力を隠すどころかいっそう扇情的に掻き立てる、ひどく挑発的なデザインの修道服だ。ノースリーブのボディスーツはぴっちりと上半身に吸い付き、漆黒の光沢が豊かなバストラインを艶かしく彩っている。タイトなミニスカートはムチムチと肉をつけた太ももの存在感をむしろ誇張し、ラバー質なニーブーツとロンググラブがフェティッシュな色気を醸し出していた。
溢れんばかりの媚肉の魅力を隠すどころか、むしろ強調して見せつけるかのような挑発的なファッション――それでいて聖女らしい神聖さを感じさせるのは、荘厳なシスターヴェールと、随所にあしらわれた聖十字のおかげだ。
肉感溢れるグラマラスボディを、挑発的な修道服で飾り立てた美しきシスター――肉欲と聖性を両立させた美しさは、もはや背徳的ですらあった。
（っち！　いくら『イバラ』の聖務だからって……このわたしがどうしてこんな場所に来なきゃいけないのよ！）
端正な美貌を屈辱に歪ませ、内心毒づく。挑発的なファッションそのままに、シスターの顔立ちも気性も、すこぶる強気で攻撃的なものだった。
クールに整った麗貌は気丈そのもので、吊り上がった瞳には強靭な意思の輝きが宿っている。シスターヴェールから流れる紫色のロングヘアーが、端正な美貌によく似合っていた。
彼女の名はリーゼ――不名誉なる「下劣」の花言葉を頂く教会の実力部隊、通称「イバラの姉妹」の一員だ。
彼女たちの目的は神の愛を説くことではなく、神の仇敵を滅ぼすこと。
そしてリーゼ自身も、過去の因縁から悪魔に対する激しい敵意を胸に聖務に挑んでいる。今回も蔓延る魔を滅ぼすべく、魔物の巣と化した下水道へと自ら足を踏み入れたのだが――
「このわたしとしたことが……っく！　こんな罠にかかるなんて……ね！」
苦々しげに吐き捨てる退魔シスター。強気な美貌が、悔しげに歪む。
数多の魔物を浄滅しながら下水道を進むリーゼだったが、一瞬の油断が屈辱的な窮地を招いてしまった。
古床に仕掛けられたトラップが突如顎を開き、不意を突かれた聖女は縦穴へと落とし込まれてしまったのだ。
このトラップは一種の魔法生物であり、床や地面は内臓じみた蠕動を繰り返している。高温多湿な肉部屋内は濃密な淫気に満ち、呼吸だけでも身体が熱くなるほどだ。落とし穴の内部は極めて狭隘で、身体をよじる余裕さえありはしない。その上無数の触手によって四肢は拘束され、文字通りに手も足も出せない状況だった。
「っち！　こんな……無様な……！」
そんな無様を許せるはずもなく、リーゼは怒りと屈辱に悪態を吐き続けていた。そして、彼女の機嫌を損ねている原因は、それだけではない。
「まぁまぁ、あまり興奮されてはいけませんわ。今は、この状況をどうすれば抜け出せるかを考えなければ」
「っ！　光流、何呑気なこと言ってるのよ！　こんな状況、とっとと……！」
「確かに、好ましくない状況ですわね。自らこのような罠にかかる心境、わたくしにはまったく理解できませんわ」
「本当いい性格してるわね、あんた！」
買い言葉に売り言葉。光流と呼ばれた少女も同じく陥穽の中で触手に囚われているのだが、焦りも弱みも少しも見せずに涼しい表情だ。慇懃無礼を絵に描いたような対応が、シスターの怒りに更に油を注ぐ――可憐な童顔に浮かべた微笑から、それが敢えての対応であるのが手に負えない。
荒神光流――『魔胎都市』トーキョーより来たという、うら若き退魔師。紅白に彩られた装束は東洋の巫女らしい神秘性を感じさせながらも、露出度の高い際どいものだ。無垢な童顔とは裏腹に生意気盛りなグラマラスボディを、真紅のインナーがフェティッシュに飾り立てている。ラバー質に照り輝く密着生地に包まれた巨乳の存在感や、鋭く切れ上がったハイレグクロッチから露わに覗く太ももの肉感など、リーゼのそれと比しても勝るとも劣らないほどに蠱惑的だ。
「お褒めに預かり光栄ですわ、魔王殺しの異名を持つ聖女様。ですがわたくしは、単に事実を述べただけですわ」
まったく気持ちの籠っていない笑みを浮かべながら、柔和に語る光流。態度こそ丁寧だが、裏に潜ませた煽りは、だからこそ痛烈だ。
（っち！　最初に会った時からこうだったわね。この子とこんな所で再会し

て、しかも一緒に捕まっちゃうなんて……神よ恨みます、こんな最悪の試練をお与えくださるなんてね！）

聖職者らしからぬ毒舌家のリーゼと、慇懃無礼な巫女の光流。お互いタイプは違うが、口の悪さは譲らない。

そんな二人は退魔師という立場では同業ではあるが、完全な味方同士というわけでもなければ、信頼関係を築いているわけでもない。

一度は窮地を救ってもらった恩義もあるし、悪い人間ではないともわかっているが、光流の行動や目的には不透明な点が多いのもまた事実なのだ。

お互い協力し合いながらも、安心して背中を任せるわけにはいかない――そんな微妙な関係の退魔師二人は、今、仲良く落とし穴に嵌まり、狭い空間で豊満な女体をお互いに押し付け合っている状況なのだった。

「確かに、わたくしたちにはゆっくりしている時間はありませんでしたが……実に心苦しいですが重ねて言わせて頂きますわ、このような罠に落ちてしまうとは、失礼ながら実に」

「も、もういいわよ！　でも仕方ないじゃないの、あの忌々しいスライムを逃がすわけにもいかないでしょ！」

ことの次第はこうだ――

下水道内部で遭遇した、不定形の下級な魔物。それは道中、身動きすらできない通風口を通る間に、無抵抗なままのリーゼを嬲るだけ嬲って逃走した、忌々しいスライムだった。

勿論、そんな怨敵を見逃すイバラの姉妹ではない。もともと武器さえ触れるスペースがあれば、一撃で滅ぼせるほどの力量差があったのだ。

ここで会ったが百年目――怒りと憎悪に任せ逆襲に出たリーゼだったが、その瞬間にトラップが発動し、道中を共にしていた光流ごと落とし穴に落ちてしまったというわけだ。

「はぁ、思い出したらまたムカついてきたわ！　あのスライム、ここを抜け出したら今度こそ……っく、うぅ！」

「発奮なさるのは結構ですけれど……ふぅっ！　狭いので、あまり暴れられると……ふぁ、こ、擦れて……」

「そ、それは……はぅっ。わ、わたしだって同じよ……も、もう……！」

肉牢内部は、人間一人でいっぱいになってしまうほどに狭苦しい。そんな狭所に二人一緒に落ちてしまったリーゼと光流は、お互いの肢体をぎゅうぎゅうと押し付け合う、完全密着状態で押し込められてしまっていた。

二人はそれぞれ膝立ちの状態で、両手は腰の後ろで触手拘束されてしまっている。正面から抱き合うように身体を寄せ合わせざるをえず、互いに譲らぬ巨乳がむにゅむにゅと肉を押し付け合って撓んでいた。体温がわかるほどの密着距離、もがけばもがくだけ乳鞠同士が擦れ合い、スーツ越しに柔らかくも豊満な肉感が伝わってくる。

「ちょっ……あ、あんたこそそんなに動かないでよ。そ、そんなに動かれると……ふぁ、く、んん……！」

「リ、リーゼ様こそ……少し大人しくしていてくださいませ。胸の大きさぐらいしか誇るところがないのはわかりますが、このように押し付けられては……はぁ、は、あ……あっ！」

「だ、誰が胸だけよ！　あんたこそ大人しくしてなさいよ、こんな拘束、すぐに解いて……っく、うぅ～！」

罠に嵌まってしまったとは言え、イバラの姉妹の身体能力なら、この程度の拘束を解くことなど難しいことではない。だがそれも、尋常に四肢を伸ばし動かせる余裕があってこそだ。ほとんど身じろぐことさえできない肉牢内部では、触手拘束を解くどころか、指一本さえ動かせないのが実情だった。

「光流！　そんなに言うなら、あんたお得意の術でなんとかならないの？」

「あらあら、これは異なことを。たった今、この程度の拘束、簡単に解けると伺ったのですがわたくしの気のせいでしたでしょうか？」

「そ、そんなのどうでもいいでしょ！　できるの、できないの⁉」

「……わかりましたわ。わたくしもこのような不快な場所はもう限界ですもの。しかし、そのためにはしばし精神の集中が必要です。ですからリーゼ様、非常に申し上げにくいのですがしばらく静かにして頂けると……」

「ぐっ……わ、わかったわよ！　仕方ないわね、それじゃ……黙ってるわ」

光流の言葉に従うのは屈辱の極みだったが、それがもっとも効率が良いのでは仕方がない。それに、確かにもがくほど身体が擦れ、精神も体力もすり減ってしまうのは事実なのだ。

「…はぁ、はぁ、はぁ……っん…」

「すぅぅぅ……ふっ……く、ん……」

しばしの沈黙。だが何もしなくても、この淫気に満ちた空間にいるだけで肉体も精神も苛まれてしまう。肌に粘り付くようなじめじめとした湿気に、ヌルヌルと蠢く不気味な壁面。まさしく生物の内臓を思わせる不快さの上、互いの体温が伝わってしまうほどに狭隘すぎるのだ。僅かに身じろぐだけでも媚肉と柔肉とが擦れ合い、零れた吐息が互いの顔にふきかかる。

（な、何なのよこの状況。光流と二人っきりでこんな……胸が擦れて、へ、変な気分になっちゃうじゃないの……）

気まずさを伴う、奇妙な空気が流れる。少しでも動揺すれば、密着した乳房の柔らかさだけでなく、心臓の鼓動までもが伝わるような気がして、ただでさえ暑苦しい中で余計に身体が火照ってしまうのだ。

「はぁ、はぁ……ん。ふ、う……」

「ふぅぅ……っすぅぅ。ふぅ、ん…」

術の準備のためだろう。光流は両目を瞑って、時折深く息を吸っては意識を集中させている。だが彼女とて、状況はリーゼと同じなのだ。静かな吐息の中にも、熱いものが漏れ出していた。

（……あまり、よろしくありませんわね。この状況……気を練るには、どう

にも環境が悪すぎますわ……）

表情には出さないが、光流もまたそれは感じていた。光流が行使しようとしている荒神流の法術は、強力な式神を招来し、四方周囲の魔的存在すべてを浄破せしめる必殺の呪法だ。だが広範囲への強力な効果を発揮する分、その発動に必要な霊力を練り上げるためには、精神集中が不可欠なのだ。

だが淫気に満ちた密着肉部屋では、集中を妨げる要素が多すぎる――

「ふぅっ、ん、く……っふ！　ふぁ……ん、んん……んっ！」

「んんっ……ちょ、ちょっと光流！　へ、変な声出さないでよ……っ！」

「リ、リーゼ様こそ……あ、ふぅ、んんっ！　少しお黙りになって……う、動かないでください……んんっ！」

わかっていても、まったく動くなというのは無理な話だ。身じろぐたびに豊満すぎる乳房が擦れ合い、ラバー質なスーツの滑りと、汗と湿気にまみれた柔肉の感触が伝わってしまう。発情した吐息の熱さと汗の匂い、そして同性ならではの甘く危険な肉感とが、妖しく背徳的な興奮を呼び起こす。

（み、光流の胸……すごい、柔らかい。それに、香木の香りかしら……汗と混じって、すごく、いい匂い……）

（リ、リーゼ様のお胸……はぁぁ。悔しいですけれど、羨ましいほどの巨乳ですわ。ああ、すごい……）

濃密な淫気に犯された上、極度の緊張感で余計に研ぎ澄まされてしまった感覚が、危険な興奮を覚えてしまう。お互い口には出さないものの、羨望さえ覚えるほどの見事な女体に、思わず耽溺してしまっていた。

だが、二人を苛むのは、同性同士で睦み合う危険な肉悦だけではなかった。罠に囚われた獲物に対し、貪婪な魔物が手を出さないはずがないのだ。

「ん、くぅ……ふぁ、ああっ⁉」

「⁉　ど、どうしたのですかリーゼ様……ふぁ、あ、ああっ⁉」

ビクン！　と、寄せ合ったままの豊満ボディを震わせるリーゼと光流。押し付け合わされた双乳がむにゅむにゅと撓み、黒と紅のボディスーツが艶かしく照り輝く。

「うぁ……っく、ふ、うぅぅ！　こ、こいつ……あ、あの時の……っ！」

「ス、スライムが……ああ。壁から、滲み出してきますわ……はう、うぅ！」

二人を悶えさせているのは、壁から浸潤してきた粘液状の怪物――先ほどリーゼから逃れた、あのスライムだった。ゼリー状の軟体が、壁面の僅かな隙間から、トロトロと染み出しては溢れ出して来る。頭上から滴るアメーバが二人の少女にべっとりとへばりつき、側面から溢れ出したスライムがスーツの表面にヌルヌルと絡みつく。

「ちょ……こ、こいつ⁉　こんな時にまた……離れなさい、殺すわよ！」

ただでさえ憎悪の対象だったスライムにまたしても奇襲され、憎憤の声を上げるリーゼ。だがいくら凄んでも、密着拘束された状態ではまったく手の出しようもない。それだけでも相手を殺せそうなほどの鋭い視線でキッと睨みつけるも、シスターにできる抵抗はそれだけだった。

無抵抗な獲物の肉体を、スライムは無遠慮な蠕動で舐め回してきた。生意気そのものの美巨乳に、豊満すぎる肉尻。むっちりと肉を張った太もも、ノースリーブで露わに晒された肩口に、汗に蒸れた腋窩、密着スーツに浮き出したお臍のくぼみ――豊満すぎる退魔師の女体は、貪婪な魔物たちにとって、そのすべてが垂涎の的なのだ。

すでに一度その美味を楽しんでいたスライムは、今一度媚肉の快楽を貪ろうと、うねうねと蠕動を繰り返し、シスターの女体をねっとりと愛撫する。

「くぅっ……い、いや！　気持ち悪いのよ……は、離れなさいよ、それ以上は許さないわ……あ、ああっ！」

ぬる、にゅるっ、にゅるるるんっ！

声だけの制止を、むしろ楽しむように、スライムはその動きを激しくする。

側面から溢れ出した粘濁は大きく開いた背中にへばりつき、うぞうぞと蠢いて珠の美肌を汚辱する。胸元に吸い付いたものは密着スーツのフェティッシュな感触を楽しみながら、ねっとりと仮足を伸ばして豊満な巨乳を揉み搾ってきた。生意気そのものにツン、と釣り上がった乳峰が、薄く広がった粘膜に包み込まれ、形が撓むほどの強さで揉み潰される。

「ふぁっ……く、ふぅぅっ！　いやよ、む、胸はダメ……ふぅ、く、ああっ！」

とらえどころのない不定形のくせに、女体を責める動きはいやに力強く、何より執拗だった。広がった粘膜に巨乳すべてをすっぽりと包み込まれ、スーツ越しにむにゅりむにゅりと何度も何度も揉み込まれる――まるで何人もの男たちに乳房すべてを揉み掴まれ、いっせいに犯されているかのようだった。

「ふぁっ……はう、く、うぅぅっ！　し、しつこい……ふぁぁっだめぇ、胸っ、そ、そんなに強く……うぅぅ～！」

ぐにぐに、むにゅむにゅ。スライムが勢い良く蠕動するたび、形よく整った美乳がめちゃくちゃに撓まされる。そのたび駆け巡る、おぞましくも快美な乳悦に、リーゼは悔しげな喘鳴を搾り取られてしまっていた。

（っ……さ、最悪！　やっぱりこいつ……さ、最悪だわ。ヌルヌルした感触も、弱いところばかり責めてくるやり方も……い、いやらしすぎるのよ！）

悔しげに柳眉を歪めながら、快楽に打ち震える恥辱のシスター。媚薬性の体液に加え、女の弱みを的確に責めてくる巧みなテクニック――先刻のダクト内での陵辱でも、愛撫だけで絶頂にまで昇らされてしまったほどなのだ。

認めざるをえない――否、身体が覚えてしまっている。スライム愛撫の粘悦は、あまりにおぞましく、そして甘美な代物なのだと。

「くぅぅっ……は、あ、あぁっ！　い

著者近刊　『新装版 聖天使ユミエルⅠ～Ⅱ』『ディバインハートマキナ ～反逆の女神～』『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ スパル虜囚魔辱編』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』他
好評発売中！

最初のいたずら…治療の日から半月ほど
姫様の身体を触りつくした魔導師キース
は…恥ずかしいですキース様ぁ
今日は一人でできる魔力路の矯正と称してオナニーをしこもうとしておりましたのニャ
漫画 COMIC／時丸佳久（ときまるよしひさ）
【原作】磯貝武連
【キャラクター原案】成海クリスティアーノート
エルフの国の宮廷魔導師になれたので姫様に性的な悪戯をしてみた THE COMIC
第2話
キース様のおひざの上にこのような裸でなんて…
大丈夫！俺の事は椅子だと思ってください
そ…そのような失礼な事はわわ、
キ・イ・ス・なんつって
むしろスケベイスなのニャ
この治療法はまずこの状態で憶えてもらうのが一番効果的なのです
はうう〜
では胸から揉んでみましょう
がんばりましょう姫様！
はい…

一人でできる治療法…

キース様がしてくださるように上手くできますでしょうか…

さわっ

んっ

大丈夫ですか？

はいっ

はじめはゆっくりやさしく揉んでください

むにっ

どうですか痛くはないですか？

はいっ

むにっ

まだちょっと痛いけど…

はぁ

いいですよ

ムニュ

ムニュ

キース様の声を聞いてると気持ちいい

じゃあ先っぽもクリクリしてみてください

クニュ

んっ

あぁ
ピクッ
くり
ピクッ
ピクッ
くり
ピクッ
あっ
気持ちいいの来ましたか？
くにゅ
は…い
先っぽ…クリクリしてると
くにゅん
もじっ
もじっ
なんだかおまたがきゅ～んって
くり
くり
いいですね治療がうまくできている証です
はうっ嬉しいですう
くぅ～かわいい
食べちゃいたい♡
ピクッ
あっ
だがあせりは禁物じっくりゆっくりほぐして
スケベ処女ま[redacted]こに育てておかないと…
では片方の手でおまたを触ってみましょう
は…い
おまた…

キース様に触られると一番気持ちのいい所…

くちゅっ

…あれ？

ん

はっ

すちゅ

ぬちゅっ

気持ち…いいけど…

くりっ

キース様に触られる時より…

ビクッ

ふむ…反応が鈍いな…

姫様

気持ちいい事を考えながらやるとより効果的です

気持ちのいい事？

姫様がとても気持ちいいと思う事です

わたくしがとっても気持ちいい事…

がんばりましょう姫様

キース様になでてもらったり
ほめられたり…
いいですよ姫様
お上手です
よくできました姫様
かわいいです姫様
だっこされたり
好きです姫様
キース様
キース様っ
はうぅん♥キースしゃまぁ♥
気持ちよくなってきました？
はいきもちいいでしゅ♥
ではちょっとむいてみましょうか
むく？
こうするんですよ
ぱうっ!!

気持ちのいいのが大きくなったら
この皮をむいて擦るんです
らめれすっ
そこっ
きーすさまっ
頭がまっ白になるのが来そうですか？
白いのと
おまたがきゅーんって
来そうなら前に教えた呪文を唱えてくださいっ

オーム・アン・クォ・イク！
おま■こイクです姫様！
お…おま
おっ
おっ
おっ

人気の変身ヒロインもの
『変幻装姫シャインミラージュ』の
でいふいーと、本誌初登場！
魔法騎士
ノーブルムーン
Magic knight Noble moon
白濁に染まる月
小説 NOVEL／でいふいーと
挿絵 ILLUSTRATION／スウィッチ01

「ぐぅおおぉぉ!! く、クソ……俺が、負けるなどとぉ……」

薄暗い、巨大なホールほどはありそうな空間内に響く低く重い声。怒りと苦しみに満ちたその声の持ち主は、二足歩行と身体の造りという点では人間に近しいモノを持っている。

だが、成人男性の平均身長を優に上回り、異常とも呼べるほどに発達した筋肉を持つ体躯。何よりも黄色い肌に鋭い牙と、ただの人間と称するには首を傾げざるをえない姿は、虎と人を融合させた新種の生物のようだ。

しかし、そんな怪物の身体は今は傷だらけとなっていて、厚い胸板は特に大きな、鋭利な刃に切り裂かれ血が滴っている。

「貴方のような雑魚に時間をかけるわけにはいかないわ」

怪物と相対するのは一人の少女。黒を基調とした、ボディラインの浮かぶほどに密着するドレス風のコスチュームは胸元が開き、よく実ったEカップの乳肉の肌色が見える。

露出する腹部は編み目によって僅かに隠れているものの、十分に異性の目を惹く魅力に溢れている。

大きく開いたスカートは前の部分だけがなく、露わとなっている下半身のレオタードが扇情的だ。

暗闇でも生える銀色の長髪も合わさり、まるでどこかの国のお姫様と錯覚させる姿。黄金色の双眸が怪物を静かに捉え、白いグローブに包まれた手に持つ騎士剣を構える。

「クソッ!! 死ねェ!! ノーブルムーンッ!!」

身体どころかコスチュームにすら傷一つ負っていない、ノーブルムーンと呼ばれた銀髪ヒロインを前に、怪物は怒りに叫ぶ。

両手の指から鋭い爪を伸ばし、牙を、そして殺意を剥き出しにして怪物は地を蹴った。

常人では到底反応することもかなわない、圧倒的な速度。事実、ノーブルムーンがその場から動く気配はない。

背後に回った虎怪人が、ヒロインの命を刈り取る為に剛腕を振り下ろす。それは悲鳴すらも上げさせずに戦いを終わらせる一撃――のはずだった。

「無駄よ。貴方の力は私に通用しない」

「グゥアアァァァッ!?」

爪の先端が銀髪ヒロインへと到達するよりも前に、虎怪人の腕が血をまき散らしながら宙を舞った。

苦痛に歪む怪人の双眸が捉えたのは先まで見えていた銀色の後頭部ではなく、数多の怪人達を斬り裂き、自身を劣勢へと追い込んだ騎士剣。

異形の力を持つ怪物の速度に翻弄されることなく反応し、振り向き様に腕を斬り飛ばした銀髪ヒロインは、剣を持つ手に力を込めた。

「これで終わりよ。ムーン・ストライク!!」

ノーブルムーンが剣の切っ先を虎怪人の分厚い胸板へと向けると、剣先から三日月型の光が形成されていく。

その時間は一瞬。銀髪ヒロインの全身から湧き上がる魔力の光が集約し、直後に閃光が走った。

ダメージによって姿勢を崩した怪人にそれを回避する手段はなく、改造された強靭な肉体をもってしても、一瞬でも防ぐことは不可能。

虎怪人は身体に三日月型の穴をあけ、ドサリと、壊れた人形のようにその場に倒れ伏す。

「ふぅ……これで後は……」

周囲に誰の気配もないことを確認すると、ノーブルムーンは目を閉じ一度深く息を吐いた。

目的地を前に、張りつめ続けていた緊張の糸を一瞬緩ませる。数秒の間をおいて再び瞳を開く時には、正義の炎を宿した双眸が奥にある巨大な扉を映していた。

※

突如として現れた、異世界からの侵略者『ダークビースト』。

獣と人間を合体させたかのような姿をした、異常な存在による襲撃に人々は恐怖した。

しかし、世界を脅かす闇があれば光もまた存在する。

光月美夏。ダークビーストが現れたその日に、彼女の自室に現れた虹色の光。それはダークビーストに滅ぼされた世界に残された魔力であり、彼らを倒して欲しいという願いとともに美夏の身体へと消えていった。

その時から光月美夏は異世界の魔力を得て、魔法騎士ノーブルムーンとして戦う日々が始まった。

※

異形の怪人達との数多の戦いの末、騎士ヒロインはとうとうダークビーストのボスの待つ空間から、扉を一つ跨いだ場所にまで辿り着いた。

扉を開くと、そこはまるでファンタジー世界の玉座の間を彷彿とする空間。

煌びやかな装飾に彩られ、自然と目を惹く優美な空間は、悪逆非道の限りを尽くす組織のボスの部屋には不釣り合いに見える。

「よく来たな。ノーブルムーン」

そして何よりも異質なのが、玉座に座る巨体。底冷えする声の主である、白馬と人間を混ぜ合わせたかのような姿の怪物の存在。

ダークビーストの首領である「ボルス」。異形の馬面を下卑た笑みで歪ませながら、開いた扉の前の騎士ヒロインを前に余裕の態度を見せていた。

「ボルス、貴方の悪行もここまでよ。ダークビーストに滅ぼされた世界の為にも、私達の世界の為にも、貴方は私の剣が断つ!!」

戦闘態勢に入っていないにもかかわらず、今まで相対してきた怪人とは桁違いのプレッシャーを放つボルスを前に、ノーブルムーンは己を奮い立たせるように切っ先を向ける。

そう、自分達が暮らすこの世界だけではない。目の前の悪によって滅ぼさ

れた数多の世界の為にも、負けるわけにはいかない。
「大した自信だな。やってみるといい」
最終決戦に迸るノーブルムーンの魔力。しかし、その膨大な力を前にしてもなお、ボルスは余裕の態度を崩さないどころか玉座から立ち上がる気配すら見せない。
「いつまでも余裕を見せて……後悔しないことね!!」
ノーブルムーンは地を蹴ると、扉の前で戦った怪人を超える速度でボルスとの距離を一瞬で詰めた。
刃の届く範囲にまで到達しても反応を見せない白馬人獣。しかしギラついた双眸だけはしかと正義の騎士ヒロインの動きを捉えている。
ボルスの不気味なほどの余裕に魔法騎士の表情が一瞬強張るが、それでもチャンスであることに変わりはない。
「ムーン・ストライクッ!!」
多くの怪人を倒してきたノーブルムーンの必殺技。さらに、今回は最終決戦ということもあり普段以上の魔力を込めての一撃。
この距離ならば回避することは不可能であり、防御しようとも無事で済むはずはない。これで倒せなくとも、深手を負わせることは確実。
「う、嘘……!?」
だが、現実は銀髪ヒロインの予想を覆す残酷なモノだった。
「グハハハッ!! 正義のヒロイン、ノーブルムーンの力はこんなものか!?」
必殺技の直撃を受けているはずのボルスの高笑いが、銀髪ヒロインの心を軋ませる。
三日月型の光が馬怪人の巨体に当たっているのは確実。今も光は途切れずに攻撃は続いているというのに、ボルスの表情が苦悶に歪む様子すら見受けられない。
「まだよ……もっと、魔力を……!!」
圧倒的な力の差を感じ、攻撃している側のノーブルムーンの表情が焦燥に歪む。もしかしたら、別の弱点があるのではないか。その可能性が脳裏を過ぎるものの、絶対の信頼を置いていた必殺技が効いていない焦りが、銀髪ヒロインの選択肢を狭めた。
ボルスの身体を貫かんとする強い意志とともに、全身全霊の魔力を集め威力を増大させる。今までと比較にならない輝きを放つ三日月型の光――だが、
「ふん、やはり俺が滅ぼした世界の力などこんなものだな」
ボルスの声に、表情に、光を受けるその身体に変化はなかった。
まるで何もされていないかのように悠然と立ち上がる馬怪人の姿を、変身ヒロインは驚愕に見開いた目で見つめることしかできない。
「茶番は終わりだな。フンッ!!」
「……ぁ……おぐうぅぅっっ!?」
圧倒的な力の差を見せつけられ、動揺するノーブルムーンはボルスの行動に対する反応が遅れてしまった。
気づいた時には、ムーン・ストライクをものともせずに前進する馬怪人の拳が、深々と編み目に僅かに隠れる腹部へとめり込んでいた。
魔力での防御を軽々と突き破る剛腕での一撃に、いとも容易く吹き飛ばされるノーブルムーンの意識。最後に聞こえたのは、自らの無様な悲鳴と地に落ちた剣の音だった。
※
「んぶっ……!?」
顔面に何かをかけられた感覚に、ノーブルムーンの意識は無理やりに覚醒させられた。
「なに、これ……へ、変な臭い……私はボルスに……う、腕が……」
鼻腔を刺激する異臭に眉をひそめる。さらには顔にかけられた液体と思われる何かは、ドロドロと肌に張りついているようで気色が悪い。
嫌悪感に満ちた目覚め。同時に意識を失う前の記憶に混乱する頭の中で、自然と手を伸ばして顔を拭おうとするもそれはできなかった。
見れば両手は黒い光によって縛られ、外そうと力を込めても一切反応はない。これが魔力で作られたものだと理解はできたが、少なくともノーブルムーンにそれを破る力はなかった。
「負け犬に相応しい、いい姿じゃないかノーブルムーン」
「ぼ、ボルス……私はまだ負けていないわ!!」
座らされた状態で声に反応して見上げれば、敗者を見下すように笑う白い馬顔。銀髪ヒロインは怒りを込めた瞳で睨みつけた。
力の差は歴然。それは先の攻防で思い知らされたことではあったが、だからといって負けを認めるわけにはいかない。
拘束された身体は自力で解くことはできず、武器も手から離れてしまっている。しかし、それで目の前の巨悪へと屈服など、人々の希望の象徴たる変身ヒロインにできるはずがなかった。
「俺の一発で気絶した負けを認めないとはな。まぁそんな奴が従順な肉便器になる姿を見るほうが面白いがな」
「に、肉……便器……? ひッ!? な、何なの、それ……」
聞き慣れない言葉に思わず反芻するノーブルムーン。殺されるわけではないのだろうが、その単語から意味を想像すると背筋が寒くなる。
さらに、目の前に現れたボルスの股間から伸びる巨大な竿のようなモノ。これで人を撲殺できると思えてしまう異形に、流石の正義のヒロインも表情が引きつった。
その巨体に似合う太く長大なモノが何であるか。それは口にせずとも想像はできる。だからこそ、ノーブルムーンは、身体を異種の恐怖で震わせた。
「お前のお陰でほとんどヤラれたからな。その責任を取って貰おうか」
「だ、誰が貴方の思い通りにな――おぶぅぅぅぅぅッッ!?」
屈服していないことを強調するよう

に開いた口へと叩き込まれる、ボルスの肉の槍。口腔を穢す雄の味と、異常な太さの異物に銀髪ヒロインは目を見開いた。

（わ、私の口の中に……ボルスの……ぺ、ペニス、がぁ……）

口での呼吸を阻害する極太の凶器。必死に鼻での呼吸に切り替えるも、至近距離から嗅覚を刺激する雄臭と、男の、それも憎き敵の肉棒を咥えさせられている衝撃に、変身ヒロインの頭の中が口腔と同様にシェイクされていく。

「お前の意見なんて聞いていない。俺に比べれば雑魚同然だが、魔力を持ってる女はいい母体になるからな。怪人共を産んで貰おうか」

「んんぅっぶ!! ぐじゅぶ、じゅぐじゅッ!! んぶぅ、おぼぉぉッッ!?」

（私が……怪人達を、う、産む……!? そ、そんなことは、絶対に嫌……!! どうにか、どうにかしないと……）

ティアラごと頭を掴まれ、一切の身動きを封じられた状態で行われるパワフルなピストン運動。変身ヒロインの小さな口を強引に拡張し、内部をも掻き回す肉の律動。

ボルスの非人道的な言葉は、ノーブルムーンにとって最悪の結末。悪の組織の怪人を産むだなどと、想像するだけでも怖気が走る。

しかし、ノーブルムーンの口から出るのは肉チンポによる乱暴な性的攻撃による苦悶の声に、下品に開かされた大口の端から垂れる唾液。

時間が経つにつれて増えていく粘液は、大きく開いた乳房へとポタポタと垂れ落ち、巨乳の谷間へと流れ、卑猥に光る道を作っている。

（……はぁ、く、苦しい……の、喉の奥に苦い液体が……流れて、き、気持ち悪い……!!）

肥大化していく雄液の臭いに嫌悪を覚え頭をクラクラとさせながらも、ノーブルムーンに反撃の手立てはない。

ただただ、この卑猥な蹂躙が早く終わることを祈り、相手に隙ができるチャンスを待つことだけ。

「今までで一番いい口マンコだぞノーブルムーン!!」

「んんぐじゅぶ!! おぶぅぅッ!! んぐぶじゅ、ぐじゅぬじゅりゅぅぅ!!」

だが、肉体的なダメージ以上に変身ヒロインを襲うのは、穢され、犯されているという精神的ダメージ。

単純な痛みならば耐えることはできたかもしれないが、連続で襲う未知の感覚が、硬く抵抗する銀髪ヒロインの心への衝撃を強めていく。

（い、いつまで、こんなことを……）

無造作に掴まれる頭。自由の利かない両手。為す術もなく繰り返される、いつ終わるとも知れない口腔陵辱に、ノーブルムーンへと叩きつけられる敗北感。

ボルスの肉棒から分泌されてくるカウパーが、段々と濃くなっていくのを舌と喉で感じ取りながら、湧き上がる吐き気に瞳が涙で滲んでいく。

「さぁザーメンを口の中にぶちまけてやる、しっかりと味わえッ!!」

耳に届く馬怪人からの発射の合図に反射的に目を見開くも、できるのはそれだけだった。

口の中で膨らむボルスの剛直。突然の変化に驚きを見せるよりも早く、変身ヒロインの口の中を穢す異物は爆発した。

びゅりゅりゅるるうぅぅぅぅ!! びゅぶっりゅりゅりゅりゅぅぅ!!

「んんんんぅぅぅ〜〜〜〜〜〜〜ッ!? んんぅぐ、ん、んぶうううぅぅぅ!!」

（あ、熱いのが、喉の奥に入ってくるぅぅ!! ね、ネバネバしていて、苦いぃ……いやいやイヤあぁぁぁぁッ!!）

ノーブルムーンの口から喉の奥まで白く染め上げる、ボルスの異常精液。濁流のような勢いで噴出する白濁粘液は、容赦なく口腔の隅々まで蹂躙し、凛々しい美少女の頬を膨らませ間抜け面へと変化させた。

こみ上げる嘔吐感を上回る勢いで、ひたすらに胃へと直接注がれていく感覚。体内まで穢されていく現実に、ノーブルムーンは苦悶の声を上げるだけ。

苦味に支配される変身ヒロインの口の中は、まさに馬怪人のザーメンを受ける口マンコと呼ぶに相応しい。

「ふぅぅ……久々にこんなに出したな。魔力を宿した女はやはり具合がいいようだ」

「んんぅぅッぶ……ふぅむぅぅぅ……じゅぷぉッ!? ぁはぁっ……げほっ!! ごほッ!! ぼ、ボルス……貴方は、最低よ……!!」

ゆっくりと引かれていくボルスの腰。強引に嚥下させられた魔法騎士の唇は、まるで張りついたかのように肉幹を追い、無様なひょっとこ顔を晒す。

追いきれなくなり、馬チンポが離れた際に発せられた間抜けな音が、銀髪ヒロインの心へと追い打ちをかけた。

激しく咳き込む度にビチャビチャと床を汚す、精液と唾液の混合液。新鮮な空気を欲して必死に呼吸をするも、口を、鼻を通る雄臭さが魔法騎士を蝕んでいく。

「最低で構わん。お前が立派な肉便器になるように躾けてやるから寝ていろ」

「あぐッ!! 今度は、何を……」

反抗することもできないまま、ノーブルムーンはボルスに蹴り倒された。拘束された腕は頭の上で、仰向けに寝かされている姿は、そのプロポーションと衣装もあって女としての魅力を十分に振りまいている。

プルンと揺れた乳房もまた、先の淫液に濡れた卑猥な光を放っており、ボルスの嗜虐心を強く刺激する。

「俺のチンポをもっと味わって貰うぞ。今度はそのデカいオッパイでな」

「そ、そこはダメッ!! は、放してッ!!」

馬怪人の手が、首元から伸びる二本の布地を掴んだ。それは乳房を隠す為に支える必要な部分であり、なくなればどうなるか、考えるまでもない結果

著者近刊 『変幻装姫シャインミラージュ　砕かれるプライド、穢される存在』 好評発売中！

にノーブルムーンは声を荒らげる。
しかしボルスはその言葉を無視し、むしろ下卑た笑みで返した。魔力によって守られているはずの魔法騎士のコスチュームは、馬怪人が腕を一気に引いただけで、ビリィっと音を立てて容易くちぎられてしまう。
「いやああぁぁッ!! み、見ないで……!! 見てはダメぇ!!」
勢いよく引き千切られたコスチューム。形のよいたわわに実った乳果実は、プルンっと音を鳴らすように全体を晒しながら自由に揺れ、一番隠したい桜色の突起がボルスの悪意に満ちた視線に晒されてしまう。
せめて両腕で隠そうとしても、拘束が強まったのか最早頭上から動かすこともかなわない。完全に敵の思うがまま、玩具のようにされている現実。
「お前の身体は俺のモノだ。俺がどうしようと俺の勝手。いい柔らかさだ、口マンコもよかったがやはり胸も極上のようだな」
「んんっ……さ、触らないで……!! くぅぁ、んぅっ……私の身体は、貴方のモノなんかじゃ……ひぃっん!!」
そんな、まな板の上の鯉のように無防備な敗北ヒロインの腹部へと、ボルスは腰を下ろした。魔力によって守られている魔法騎士は、多少の重みは感じるが苦痛を伴うほどではない。
しかし馬怪人の手は二つの膨らみをギュムっと掴み、形を、柔らかさを確かめるようにして揉みしだいていく。
悪の首領に好き勝手にされ、抱くのは嫌悪のはずだというのに、肌が擦れられる感覚と、乳房を圧迫する強い力。それらが微弱な甘い電流となってノーブルムーンの身体を駆けていく。
凛々しい変身ヒロインに似つかわしくない、僅かに蕩けた声。自らの異常に困惑するノーブルムーンは必死に耐えようとするも、キュッと強く両乳首を摘み上げられてしまうと、ビクンと過剰なまでに反応を示してしまった。
（ど、どうして……ボルスなんかに、好きにされているのに身体が……熱くなってしまうの……？）
本来ならばあり得ない感覚。唾棄すべき敵に身体を弄られ、あまつさえ高揚感を覚えてしまうだなんて。
立て続けに受ける淫らな行為と、湧き上がる未知の感覚に戸惑いを覚える魔法騎士。しかし、深い思考を許さないとばかりに、ボルスは次なる陵辱を始めた。
「これなら俺のチンポも満足できそうだな。魔法騎士ノーブルムーンのパイズリを味わわせて貰おうか!!」
大きな二つの山に隠れた中央の隙間へと、強引に捻じ込まれていく淫液に塗れたボルスの肉槍。一切の衰えを見せない熱く滾る怪人の雄チンポが、ノーブルムーンの乳房を性器へと変え始める。
「んぅあっ……今度は、胸に……こ、擦れて……ひぃぁ、んんぅふぅ!! あぁ……は、激しく、しないでぇ……」
先端から一気に根元まで押し込まれ、乳房を熱く擦られる淫らな、同時に心地よい電流が銀髪ヒロインへと走った。
またしても身動きできずに、ボルスによる一方的な肉棒責めを受けるだけ。長すぎる馬チンポは、腰を突き出されれば谷間から簡単に顔を出し、魔法騎士の形のよい顎を小突いてくる。
（あぁっ……ボルスのペニスがまた……私の身体を、どこまで穢すつもりなの……？ それよりも、いけないのに……胸の中で擦れて、熱く、なってしまうのぉ……）
口の次は乳房。怪人の子を産むと言われた時には想像もしていなかった部分が標的にされ、ノーブルムーンはまさか全身を犯されてしまうのではという不安に駆られた。
しかし、同時に身体を巡る熱い悦感がさらなる戸惑いとして魔法騎士を狂わせる。ズリュズリュと荒々しく前後する怪物チンポは、変身ヒロインのEカップ巨乳を削るかのようで、刻まれる強い刺激がそのまま身を震わせる甘く痺れる快感へと変化していく。
「こうして両側から挟むと、より強く擦れて気持ちいいぞ。そら、どうだ!? 気持ちいいかノーブルムーン!?」
「くぅふぅぅっ!! そ、そんなに胸を強く押しちゃ……あ、はぁっぁん!! む、胸、擦れて、ペニスで削れるぅぅ……ひぃあぁッん!!」
馬怪人の大きな掌が、肉チンポをより強く挟みこむ為に、左右から乳果実を潰れるほどに強く掴み押し込んだ。
痛みすら感じかねない力に歪む美巨乳は、何故か鋭い悦楽となって魔法騎士の脳を揺さぶる。さらにズリュリュっと音を立てんばかりの、肉槍による猛烈な前後運動に肌が、身体が芯から熱く蕩けていく感覚。
ボルスのわざとらしい質問への答えは聞くまでもないだろう。途中途中に漏れる、凛々しいヒロインが放つとは思えない、甘い喘ぎは演技ではないのだから。
「パイズリだけで随分と気持ちよさそうだな。やはり、俺の肉便器に相応しい身体だ。ここはどうだ。乳首は気持ちいいだろう？」
反抗的な態度を取ることもできずに、ただ肉の悦感に翻弄される正義のヒロインの無様な姿に気をよくしたボルス。さらなる刺激を与えんと、乳肉を歪ませる力はそのままに、硬さを帯び始めた乳首をギュゥっと押し潰した。
「んひいいぃぃぃぃッッ!? そ、そこ……だめぇぇ……ち、乳首は……んぅひ、あっひぃぃぃんん!! 潰しちゃ……んおぉ、ほおぉぉッ!?」
優しくするつもりもない、怪人の力による乳首潰し。両突起を同時に押し潰されて生じる、激しい電気ショックを受けたと錯覚しかねない激感に、ノーブルムーンは堪らずに下品な声を上げてしまう。
一度で終わらずに、戻しては潰し、戻しては潰しを繰り返す馬怪人。その

敵勢力は1名だが被害は甚大だ
ザッ
至急…我々もすぐ
ザザ
ザ
ザ
ジャミングか――いつものことね
人々の…幸せを守りたい
助けて
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ
悪を倒す――
正義の力は人々のために！
私一人で十分よ！奴らの怪人なんて
平和を守る特殊任務機関――彼女たちのスーツには
精神を…願いを力に変える機能があるのだ！
変！
身!!

そこまでよ！
特務機関ウィッシュハート!!
参上！
助かった！特務機関が来てくれた
しかもハートちゃんぜひ撮影しないと
危険ですすぐに離れて！
漫画 COMIC ぱふぇ
特務機関エージェント
ウィッシュハート
今日こそは許さんぞ！
それはこっちのセリフよ！
おのれ！毎度毎度邪魔ばかりしおって
ハァッ

うおおすげえ！初めて生の戦闘見るぜ
やれやれ——！
このままでは被害が増すばかり…
怪我人が出ないうちに決着をつけないと
ならば！
必殺の一撃で!!

ガハハハ ハハハッ
さすがはウィッシュハート!!
ドッ
ドッ
だが！ 市民のみなさまは！ オレ様の味方のようだぞ!!
ガラガラ
ガラン
ガラッ
なっ…
ギクッ
人質の命が大切なら
大人しく投降してもらおう
卑怯よ！ 正々堂々と戦いなさいッ
だから離れろと言ったのに…!!
ククク 動くなよ
にぎる
にぎる
カラン

まずはそのスーツの力を頂こうか

精神を物質に変換する発明オレ様が有効利用してやる

やめろ！その力は平和の為にある!!

お前たちが悪用していい物じゃないわ

ならばまず

市民の願いを叶えるために使うとしよう

な…何を？

捕らえられたヒロインを襲う

ふたなり改造快楽地獄！

フェアリーナイトアイナ

Fairy Knight

失われた資格

小説 NOVEL／火村龍（ほむらりゅう）

挿絵 ILLUSTRATION／てんけん

数多の敵を打ち倒し、異界の侵略者の野望を阻んできたフェアリーナイトアイナも、ついに敗れるときがきた。守るべき人々、共に闘ってきた仲間を逃がすため、敵幹部ドクターの、千を超える異形の怪物どもをひとり相手取り、激闘の果てに力尽きた。

アイナは敵のアジト、ドクターの実験室に囚われた。変身姿のままだった。アジトは内部まで、外と同じく内臓のような赤紫じみた色合いの、肉の塊で作られた部屋ばかりなのが、ここだけは鋼鉄の部屋だった。手術台のような椅子に太い錠でもって、両手は頭上、両脚は股を割った形で拘束されていた。

部屋には幾人かの男たちがいた。黒い戦闘服を着て、顔はマスクを被っている。唯一覗いている口元がにやにやと笑っている。アイナが日頃から「雑魚」と呼ぶ、侵略軍の雑兵である。

その中にひとり、白衣を着た初老の男がいた。それがドクターだった。鷲のような顔つきの男で、後ろへなでつけた白髪が尾羽を、高く伸びた鼻は嘴を思わせた。彫りの深い、皺の刻まれた眼窩の奥に、爛々と光る蒼い眼があった。

「よく耐えるのう」と、ドクターはしわがれた声で言った。

「この程度で、わたしをどうにかできるとでも思ってた？」

と、アイナは鼻を鳴らした。

少女は可憐だった。目尻のやや垂れた瞳は力強かった。細い眉を吊り上げ、桃色の薄い唇を、ツンと澄まして結んでいる。腰まで届く髪を、ツーサイドアップに纏めている。加えてその身体つき——引き締まってはいるものの、胸や尻、太ももや二の腕などには、女らしい肉がある。観察すればするほど刺激される肉体である。それがフェアリーナイトのコスチュームを纏っている。

桃色のスーツである。首元から股間を包み込むぴっちりとしたレオタードスーツの胸元にはブローチがある。フェアリーナイトの力の源である。腰の両側にフリルスカートをつけている。腕には長手袋をはめ、脚には太ももの半ばまで届くサイハイブーツを履いている。両脚を広げられているせいで、股間の、柔らかな逆三角形の膨らみの割れ目、不浄の孔の皺までもがスーツに浮かんでいる。囚われた際に、無理矢理食い込まされてしまったのである。

フェアリーナイトの力は、侵略者から逃げ出した異界の住人に授かった。初め、その力に名前はなかった。しかし、いつしか人々は、フェアリーナイトと呼ぶようになった。その衣は美しく、また、少女しか扱う資格を持たなかったためである。

——フェアリーナイトとして極めて高い能力を持つアイナは、囚われても怯えることを知らなかった。

「やり方がだめなのよ。こんな馬鹿げたことしてないで、とっとと拷問でもして、殺せばいいわけ。ねえドクター、さっきあなたが来る前、あっちの馬鹿がお粗末なものだして『我慢できねえんだろ、犯してやろうか？』なんて言ったわ。雑魚は頭まで空っぽみたい。ふーふー豚みたいに鼻息荒くして、我慢できないのは自分じゃない。『犯させてください』って土下座したら、少しは考えてあげてもよかったのにね。ま、あんなくっさくてきったないものなんて願い下げだけど。とてもわたしを満足させられるとは思えないし」

こう言って男たちを見回すと、その中のひとりが息を荒らげ、歯を剥き出しにした。股を開いた無様な格好であるが、アイナの嘲笑の鋭さは少しも衰えることがなかった。

「ねえ、いま何時？　ここ時計がなくて時間がわからないのよね」

「おう、これはすまなかった。君がここに来てから七日が過ぎておる」

「もう七日？　ドクター、あなた前になんて言ったっけ？『三日もすれば色狂いになって、男を求めるようになるじゃろう』だっけ？　もう七日も経ってるけど、これなんか意味あるの？」

と、アイナは視線で頭上のアームと、脇のテーブルに置かれた薬瓶を指した。

ドクターが手を振ると、アームが動いた。その先端にはパラボラアンテナのような照射器がついていた。それが黄色く発光すると、アイナの股間に向けて糸のように細い光が放たれる。また、男のひとりが薬瓶を取り、中のどろりとした薬を刷毛に含ませると、女の割れ目へスーツの上からぬり込んだ。

「あ、あぁぁ……」

アイナは深い吐息を漏らし、恍惚の表情を浮かべて天を向いた。この光も薬も、女を色に狂わせる極めて強い力を持っていた。しかし、アイナは変わらず嘲笑を浮かべたまま、

「あぁぁ、気持ちいい。それで？」

「数値はどれも、欲情に狂っていてもおかしくないものじゃがなあ」

ドクターはモニタを見ながら驚嘆した。自分を捕らえたこの男の驚いた顔に、アイナはわずかな優越感を覚え、肉体の内で静かに滾る衝動を慰めた。

「しょせんはデータってことよ。数値で心が測れる？　あなたたちみたいに心を捨てたやつにはわからないだろうけど、こんなの、わたしにとってはなんてことないわけ」

「やはり君は他の者と違って一筋縄ではいかんようじゃの」

「どうする？　わたしを犯してみる？」

「いや、いや、いや、それはせぬ。知っておるか？　溜まりに溜まった性の欲求の反動がどれほど強いかを。いくら強がろうといずれ限界は訪れる。そのとき、君は後悔するじゃろう。肉体の内に獣を閉じ込めていたことを」

「詩的ね」と、アイナは舌をだして嘲った。

ドクターは笑みを浮かべると、男たちを連れ出ていった。入り口にはふたりの男が残った。アームが動いて、アイナの股間に光線を、特に陰核を狙っ

て浴びせ続けた。

アイナは深く呼吸をして、目を閉じた。笑みを浮かべ、アームのひとつに取りつけられたカメラになんでもない様子を見せるが、肉体の内ではそれと真逆のものが、ドクターの言葉通り獣と化して暴れていた。アイナは強く発情していたのである。

機会を待ち続け、態度には出さないまでも、呼吸が熱を帯び始めた頃、それは巡ってきた。ドクターは一度も姿を見せなかった。入り口の見張りは時折交替した。いま入ってきたふたりのうちのひとりを見て、アイナはそれが、自分に欲情を抱いた男だとわかった。その男は豚のように太り、また息も荒かった。

アイナは目を伏せ、身体を揺すった。ひとりは身じろぎもしなかったが、豚男は、あからさまにアイナに視線を向けた。アームが動き、光を当てられると、深く息をついてみせた。ブーツを履いた足首を、くねくねと動かしてもみせた。

と、豚男が持ち場を離れアイナに向かってきた。

「おい」と、もうひとりの男が言った。

「まだ時間は来ていないぞ」

「いいんだよ」と豚男はへらへら笑って、薬瓶を手に取った。刷毛にたっぷりと薬を含ませ、アイナの股間にぬりたくった。

「あ、あぁぁっ、いやぁぁ……！」と、アイナは声をあげた。しかし心の中では、

（べたべたぬって、乱暴すぎるのよ。こんなに下手なぬりかたするのなんてあなただけ。ほんとばっかみたい。粗末なものおっきくして気持ち悪い……！）

と罵倒しながら同時にこうも思った。

（き、気持ちいい……！　やっぱり、この薬すごい……あそこがじんじんして、お、おかしくなりそう。あぁっ、あとちょっと強くしてくれたら……なに考えてるの⁉　いま大切なところなんだから、耐えるのよ……）

とも思った。

「ね、ねぇ……」

アイナがそう声をかけると、豚男はぎくりとして、

「な、なんだ」

「わたし……もう我慢できないの……」

豚男がその言葉を呑み込むのにしばらく時間が要った。やがてにやにやとした笑みが男の顔に広がった。

「おぉ、そうか、我慢できねえか」

「うん……アイナ、もう苦しくて……あそこ、じんじんしてぇ……」

アイナは顔を真っ赤にして、上目遣いに豚男を見つめた。

「こんな機械とか薬じゃもうだめなの。ねえ、ねぇ……」

豚男はたちまち落ち着きをなくして、股間をまさぐった。衣ははち切れんばかりに盛り上がり、陰茎の、グロテスクな形が、ひくひくと蠢いていた。

「おい。発散させることは禁じられている」

と、もうひとりの男が言った。豚男ははっとした様子で、

「そ、そうだな。そうだ、そうだ……」

「ね、ほんの少しでいいから……ばれたりしないわ。わたし黙ってる。カメラ止めちゃえばいいじゃない。こういうことよくあるんでしょ……？」

もうひとりの男にそう問いかけると、男はううむと唸った。

アイナは、自分が思う最も甘えた声で、さらに男たちに媚びた。「アイナ、そんなに魅力ない？」「ね、ねえ、あそこ、もうぐちょぐちょなの……」などと続けるうちに、その言葉の半分が自分の本心から出ていることに気づいた。

（これに呑まれちゃだめ。絶対にここから逃げるのよ。負けちゃだめ。大丈夫、エナジーは回復してる。わたしはフェアリーナイトなんだから……）

こう言い聞かせながらさらに男たちを誘った。その、半ば本心から漏れた言葉が、男たちに強く働きかけたようだった。もうひとりの男がなにやら操作をすると、カメラのついたアームが動きを止めた。

「いいか、十分だけだ」

「あぁ、わかってるわかってる」

豚男は陰茎を露わにした。片手で穢らわしい欲望の象徴を扱きながら、もう片方の手でアイナの割れ目をアヌスの方からツツとなぞった。

「は、はううぅっ！」と、アイナは思わず呻いた。

その快感、硬い指から生じた衝撃は予想していたものを遥かに超えていた。囚われたときより胸の内で強く戒め、愛液を漏らすまいとしていたのが、この一瞬で緩んだ。慌てて力を入れ、外に流れ出るのは防いだものの、膣内（なか）がじわじわと潤ってきた。

「え、どうだアイナ？　ここがいいか？　触られただけですげえだろ？」

「ん、う、うんっ……す、すご……あぁぁっ！」

「え、どうだよお前。見ろよ、ちょっと触っただけでこんなだぜ！　おぉおぉ、マンコ締めつけやがって、我慢してるな？　恥ずかしいか？　すぐ、このピンクのスーツも濡れちまうからなぁ」

豚男は、もうひとりに振り返りながら言った。

もうひとりの男は舌打ちすると、息を荒らげながら近づいてきた。

「あ、あぁぁ……だめぇっ、アイナ、我慢できないよぉっ」

アイナはビクビクと震え叫んだ。

「お願いっ、こんなのじゃ足りないの！　スーツずらして！　直に触ってぇっ」

「直に？」と、豚男は困惑した。「そりゃお前、触りたくても、触れねえだろ」

豚男はスーツに指をかけずらそうとしたが、びくともしなかった。

著者近刊　『プリミルシャイン 淫紋と触手コスチュームに堕とされる100日』『魔法少女リリナ&ミユ 異種交配の罠』『守護聖姫アルテアガーディアンズ 催眠恥辱に堕ちる姉妹』　好評発売中！

「ほら見ろ。俺らにはどうにもできねえよ」
「あ、あぁぁんっ！　早く、早くぅっ！　アイナおかしくなるっ、このままじゃ……あぁぁ!!」
アイナはさらに激しく痙攣してみせ、「じゃ、じゃあアイナがずらすから！　これはずひて！」と、拘束具を示した。
「それはまずいぞ」
と、もうひとりの男が言った。
「やら、やら！　外してくれなきゃやぁっ！　アイナなんでもしゅるから！　ね、フェアリーナイトの手袋、すっごくすべすべしてるの。これでたっぷり扱いてあげるからぁ」
「いつまでお堅いこと言ってんだ。こいつを見ろよ。こんなのもう壊れかけだぜ。なにができるもんか……」
陰茎を丸出しにした豚男は、もうひとりが止める間もなくアイナの腕の拘束を外した。
その途端に、アイナは自由になった手を男たちに向けた。
「ありがと、お馬鹿さん」
アイナが拘束台から下りると、激しい物音とともに扉が開き、次々と男たちが入ってきた。最後にドクターが現れた。
「あら、早いのね」と、アイナは顔をしかめた。
「こうなることは予想しておった」
とドクターは言って、床に倒れたふたりの男を見た。
「なら、さっさと道を開けることね。ゆっくり休ませてくれたおかげでエナジーももう全快。ここで暴れられたらいろいろと困るんじゃない？」
「いや、いや」とドクターは首を振った。「そんなことにはならんよ。君は暴れられん」
「こいつらがなにかするってわけ？」
男のひとりがアイナに飛びかかった。と、アイナは目にもとまらぬ速さで男の側面へ回りこみ、その頭を一蹴した。男はどっと倒れた。
「こんな雑魚がわたしに勝てると思った？」
「思ってはおらん。しかし、君の身体はもう普通ではないのじゃ」
「ああ、あれ？　薬ぬって光浴びせて、それでわたしがどうにかなるとでも？　もういいわ。わたし行かせてもらうから」
そう言うと、男たちが広がってアイナを取り囲んだ。その中のひとりが拳を振り上げた。
「ちょっと……疲れさせないでよね」
と、アイナが腕を上げ、それを受け止めたときだった。
「あ、あぁぁっ!?」
アイナは声をあげた。嘲笑を浮かべた顔が歪んで、手袋に包まれた腕を押さえた。
（い、痛いっ!?）
「どうかしたかの？」とドクターが訊いた。
「……なんでもないわ。いくわよ！」
アイナは男のひとりに狙いを定め、素早く蹴りを放った。男たちを吹き飛ばすつもりだった。
しかし、アイナの蹴りは男に受け止められた。男は避けもせず防ぎもしない。痛がりもせず動きもしない。そして、悲鳴をあげるのはアイナのほうだった。
「ひ、あぁっ！　い、いた――あ、脚がぁっ」
アイナはよろめき、ブーツを押さえて苦悶した。男の身体はまるで鋼鉄のようで、蹴った脚が折れそうなほどに痛んだ。
と、ドクターがかかか、と笑った。
「実験は成功のようじゃ」
「なんですって、わ、わたしになにをしたの!?」
「落ち着いて、よく自分の身体を確かめるといい。力が出ないじゃろう？」
「な――、うそ……ち、力が、抜けてる……!?」
アイナは胸元のブローチを見た。エナジーが溜まっている証拠に煌々と光っている。だが、コスチュームの加護がまったく得られていない。それどころか、いまこの瞬間にも力は失われ続けている。
と、にわかに股間のあたりがむずむずとし始めた。
「あぁっ、な、なに……？　なにが……」
痒みのようなものが瞬く間に焼けるような刺激となって、全身に広がった。なにが起こったのかわからなかった。しかし、股間を締めつけるスーツの感触がきつく、身体が宙に浮かぶような快感が走ったとき、ついに目に見えて変化が現れた。
「い、いやぁぁっ!!　な、なによこれぇっ!?」
クリトリスが疼きを発したかと思うと、むくむくと膨れあがり、大きく伸びたのだ。先っぽが変形すると、あの、男が取り出した穢らわしいものそのものの形を取って、スーツに巨大な芋虫のような形を浮かび上がらせた。男のペニスだった。
「こ、これ、男の人の……なんで、なんでわたしに!?」
「それだけではないぞ」
「あ、あぁぁっ！　スーツがぁっ」
ペニスを押さえつけていたスーツが裂けた。それは不自然な裂け方ではなかった。陰茎の出現に合わせてコスチュームが変化したのである。グロテスクなペニスがぼろりと零れ出た。そればかりではない、太い竿は亀頭から三分の二ほどが、コスチュームと同じ色、質感の布に包まれ、さらにはカリ首にリボンが巻かれていた。
「こ、これ……これはぁ……!?」
「君に浴びせていたのは感度を高めるものだけではない。むしろ、こちらが目的じゃった。あの光はフェアリーナイトの身体を弄くり、ペニスを生やし、衣を変化させる力がある」
こう言って、ドクターはペニスを屹

立させたアイナを興味深そうに見つめた。
「な、なんのためにこんなことを⁉ わたしを辱めようっての⁉」
「それもある。この星の人間はフェアリーナイトを神か何かのように崇めておる。この様を見せてやれば、抵抗しようという気も失せるじゃろう。君を捕らえられたのは幸運じゃった。君に効くなら、他のフェアリーナイトにも効く」
「く、う、うぅぅっ！ こ、こんなもの生やされたって、わ、わたし負けない‼ わたしが、た、闘えなくなるとでも……！」
アイナはドクターに飛びかかった。しかし、たちまち背後から伸びた男の腕に羽交い締めにされてしまった。
「ああっ！ は、放しなさいよぉっ！」
アイナは脚を滅茶苦茶に振り回した。すると、肉棒がぶるんぶるんと激しく暴れて、男たちが爆笑した。桃色の布に包まれ、リボンをつけた肉棒が踊るのに、アイナは真っ赤になった。
「わ、笑うなぁっ！ あうっ、く、ふうぅぅっ、なんでぇ、ち、力が入らないっ！」
「君は大切なことを忘れているようじゃ」
ドクターはとっておきの宝物を見せるような笑みを浮かべこう続けた。
「フェアリーナイトの力は男には使えんのじゃろう？」
「そ、そんな、で、でもちがうっ！ アイナは、アイナは女で……」
「その通りじゃ。だから君はまだ衣を纏っておる。だが、そこに生えたそれは男のものじゃ。男の象徴じゃよ。君はいま、フェアリーナイトとしての資格をほぼ失いかけておる、こういうわけじゃ。面白いじゃろう？ フェアリーナイトに屈辱を味わわせるだけでなく、無力化まで行えるとは！ さて、儂はこれで失礼するよ。こうなればこれの小型化やら量産化やらを図らねばならん。これから、君に浴びせた光を、誰もが持てる小型の銃にする。フェアリーナイトの力に反応し、陰核をペニスへと変える銃じゃ。面白いことになろうの。名前は『アイナ』としよう」
こう言って、ドクターは数人の男とともに出ていこうとした。しかし最後に足を止めると振り返り、
「君の役目はまだ残っておる。ここで淫らに堕ちていき、フェアリーナイトアイナの敗北を君たちの仲間に見せつけるという役目がのう」
そして今度こそ出ていった。重たい扉が音もなく閉まった。
「ま、待ちなさいっ！ こ、この雑魚ども、放しなさいよ、変態いっ‼」
「どっちが変態なんだ？」
と、男が言って、アイナの股間で暴れる肉棒を指した。
また別の男も言った。
「そのカバーは趣味なのか？ フェアリーナイトはチンポ生やすと、可愛いチンポソックスを履かせるのが好みだってか」
「チンポソックスか、そりゃあいい」
と、男たちは口々に言ってまた爆笑した。
「だ、黙りなさいよ！ この……！」
アイナは男の手を振り切り、手近なひとりを殴りつけた。しかし、どこを殴っても痛むのは自身の拳、ならばと脚を振るっても、ブーツに包まれた脛に折れそうな衝撃が走るだけだった。
「あのアイナちゃんがこうまで弱くなるとはなあ」
などと言いながら、男のひとりが黒い鞭を取り出した。
「な、なによそれ……」
「見ればわかるだろ。ただの鞭さ」
こう言って、男は鞭を振るった。アイナは避けようとするのだが、フェアリーナイトの資格を奪われた身体は鈍重で、サイハイブーツの食い込む太ももを強かに打たれてしまう。
「あ、あぁぁっ！」と、アイナは悲鳴をあげた。しかし痛みのためではなかった。
（な、なにこれ⁉ 痛いのに……あ、脚が、脚が気持ちいいっ⁉）
左ももの、打たれたところがにわかに熱くなり、快感が広がった。熱と同時に痺れがあった。思考を痺れさせる電流、肉体を蕩けさせる熱、それが股間に到達するや、アイナは薬をぬられ続けた身体がどこまで発情しているかを思い知らされた。
「く、くふぅぅぅ――――」
ふたなりペニスがびんびんと跳ねた。
「どうした、痛いのか？ フェアリーナイト様にはこんなの効かねえと思うけどなぁ」
と、さらに右脚も打たれると、
「ひ、ぁ――や、やめ――あぁぁっ！」
両脚の快感に膝ががくがくとして、その場から動けなくなってしまう。さらには肉棒が限界で、腰を引き、尻を突き出した格好のまま、股間を押さえてもじもじしてしまう。
「なに隠してるんだ？」と、背後から伸びてきた腕が再びアイナを羽交い締めにする。腕を広げさせられ、身体を反らされ、ペニスを見せつけるかのような格好にされてしまう。
「い、いやっ、放して、いやぁぁっ」
「おいおい、こいつもう出そうだぜ！」
と、また野次が飛んだ。
アイナのペニスはびくびくと何度も痙攣し、柔らかな布にスジが浮かび上がるほど昂奮していた。濡れている。桃色の布の先に染みができている。
「みるなぁ……みないでぇぇ……」
（は、恥ずかしいぃ……なにか、なにかでてきちゃってる……う、うそよ、このわたしが……あぁぁ、どうしてぇ……？ へ、平気なはずなのに、こんなのへっちゃらで……犯されても、た、耐えてみせるはずなのに……こんな、こんなの生やされるなんてぇ……）
「おっと、アイナちゃん涙目じゃねえか。え？ もっと泣いてくれよ、おい！」
「ば、ばかにしないで……こ、これく

らい、なんともない……んひぃっ!!」
「なんともない？　股間のでけえブツを見てからそう言うんだな」
こう言うと、鋭く振るわれた鞭が勃起したふたなりを強かに打った。
「あ、あぁぁっ!!」
アイナは大きく仰け反り、普段の自分を失い獣じみた悲鳴をあげ悶絶した。
（で、でちゃうっ！　でちゃうでちゃうぅっ！　一撃ででちゃうっ、なにかきちゃう、漏れちゃうぅぅだめぇぇっ!!）
理性を抉られ本能を剥き出しにされるが如き悦楽がアイナを襲った。鞭の一撃が過ぎると肉棒がどくどくと脈打ち、中を熱いものが、亀頭の先へ向けて昇ってくるのを感じた。それは欲望の塊、平静を装って耐えに耐え、溜まりに溜まって濃縮された性欲、それがペニスを昇って、ペニスソックスと蔑まれたものの中に漏れ出そうとしている。アイナは歯を食いしばり目を見開く、涎を垂らし鼻をひくつかせる、ひぃひぃと喘ぎながら股間に力を込める。と、ペニスのすぐ下、本来のアイナの性器がじんじんと熱を帯びて、スーツの中に、生暖かいものが広がっていく。
「ひ、ひぃ……あふぅ……ッ」
「おやぁ？　アイナちゃん、チンポに夢中になりすぎて、マンコから汁が漏れちゃってるぜ」
「んふぅぅ、お、おふ……い、いうなぁぁ……！　はひ、ふぅぅ、んふぅぅう――」
（が、我慢できないぃ……漏れちゃう、両方我慢するのなんて無理ぃぃっ！）
スーツに染み込んだ愛液が太ももを流れた。ペニスを押さえたくとも、最早少しの刺激で出てしまいそうで、どうすればいいかわからずただフラフラとする。そしてその無防備に晒された肉棒へ、さらに一撃が加えられる。
「もう耐えられないかな、アイナちゃん！」
「おふっ！　あひぃぃぃっ！　やめてぇぇぇ、ゆるしゃないんらからぁっ!!」
（でるっ、でるぅっ！　そこまできてるっ、もう漏れちゃうっ！　やら、そんな恥ずかしいのだめなんだから、わ、わらひはフェアリーナイトぉ……）
「おぉぉぉ、耐えるねぇ。だが――こいつで終わりだろう！」
鞭の先が裏スジ、カリ首の最も敏感な部分を打った。
「んひぃぃぃ――――――ッ！」
アイナは狂人の如き悲鳴をあげた。仰け反り、宙で藻掻いていた手を髪に通し、わなわなと痙攣した。ハの字に寄せられた眉、頬をひくつかせ、瞳を見開く、その瞳に映る激情、葛藤――矜持と悦楽を天秤にかけ、耐え抜こうと食いしばる歯の間から漏れる唾液の、ぬらぬらとした唇から垂れ落ちる様――可憐な少女から淫らな牝豚へ堕ちまいする無様な抵抗――気丈な面影が明滅するその果て、アイナはついに屈服した。
「でるうぅっ！　でちゃうぅぅらめぇへぇぇっ!!」
少女は屹立したものの中を怒濤の如く駆け上る敗辱の奔流を感じた。圧倒的な悦楽を前に理性は失われ、止める術なく迸った。
「でるっ、あぁぁぁっ！　でちゃうのおぉぉ見ちゃいやあぁぁっ!!」
跳ね上がるふたなり、迸る白濁、勢いづいて放たれた、熟成に熟成を重ねた欲望の塊。ペニスを覆う布地が跳ぶように踊る、汁溜めが暴れる、一定のリズムで精が放たれるたび、半分透けた布地の中に汁が溜まっていく、コンドームの代わりとなる桃布の先が、男の掌に余るほど膨張する。
「おぉぉっ、あおぉぉぉっ!!」
アイナは獣のように吠え、仰け反った末に仰向けに倒れ床をのたうち回った。桃色のスーツに包まれた腹が波打ち、勃起した乳首の形を浮かび上がらせた乳房が円を描くように踊った。大きく割られた股の間から潮がしぶいて、鈍い銀色の床に扇形の恥辱画を描いた。
――すべてを終えて、アイナは未だかつて見せたことのない屈辱を晒した。桜色の美しい髪が床に広がっていた。白手袋に包まれた手は、機械仕掛けのようにカクカクと蠢いていたのが、いまは死にかけた虫のように指が内側へ丸まり、人差し指と中指だけが時折微かな痙攣を示している。サイハイブーツを履いた脚は宙をジタバタと蹴り上げていたのが、ガニ股を披露しながらぐったりとして、つま先にはブーツの中で暴れた指の跡が浮かんでいる。と、不意にスーツの股間に大きく染みが広がるや、愛液とは異なるさらさらとした液体が床に流れていった。液体は勢いを増して、大きく弧を描いて撒き散らされた。
（こ、これが男の人のぉ……気持ちいぃぃ……あぁぁ、だめぇぇ、負けちゃだめぇ……）
「負けなひぃ……アイナ負けなひぃぃ……」
アイナは失禁に気づくことなく、うわ言のようにそう繰り返した。瞳に光はなかった。やがて、少女は目を開いたまま意識を失った。放尿は収まり、ただ肉棒のみが勃起を保って痙攣していた。

したたる汗が脂じみたものへと変わり、うら若き肌にぬらぬらと光沢が現れた頃、アイナの敵は外ではなく内にあった。再び拘束台にかけられたアイナは、ムシムシとした部屋にひとり捨て置かれた。
男どもは定期的にやってきては、アイナの屹立したものや秘すべき割れ目へ毒をぬった。ふたなりは布地をつけたままでひどく蒸れ、強烈な痒みもあった。秘裂は淫らな汁に濡れ、襞が絶え間なく蠢いて刺激を求めた。そこへ蜂蜜のようにどろりとした、妖しい輝きの、濃厚な媚毒がぬられると、アイナは狂おしい激情、憤怒の如き衝動に

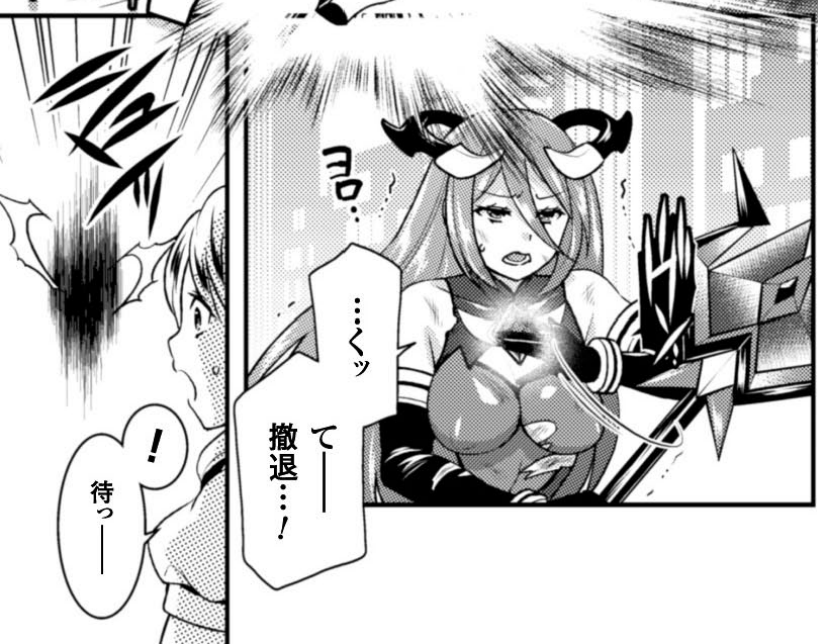
変身ヒロイン
なればこそ
悪にもある悲哀――

てやあっ！
シャイニング・
グローリー
ミサイル!!

うっ……!!

根深き呪いが私をつよく縛める

漫画 COMIC／雛瀬(ひなせ)あや



……また逃げられちゃった

今日こそ何で悪い事するのか聞こうって思ってたんだけどなぁ…

『アイ・ザ・ダークネス』…

あの子話せばわかるっぽい感じがするんだけど……

うくッ…！

ッ！

ドラッ

ドカッ

——ご…めんなさい……パパ

私……

——また〝失敗〟したな

亜衣

お前の戦いぶりは近頃特に拙劣さを増している

遠隔武器を実装させたにもかかわらず相手に攻撃を許すなど…

まさかとは思うが『シャイニー・ルイカ』の正体が友人だからと手加減しているのか？

彼女への接触を命じたのは『シャイニー・ルイカ』に関する情報収集の為だ

友達ごっこをさせる為ではない

ミイラ取りがミイラになるとは全く嘆かわしい……

——パパは…昔は優しかった

病弱だった私を付きっきりで治療してくれて……

けれど…今は何かに憑かれたように

私を『強化』する実験に没頭し続けている――

……亜衣

ごめん…なさい 次は…上手くやるから――

私の天命は強化人間の圧倒的な力を世界に知らしめ

私の研究を腐す連中の古びた倫理観を砕き新人類の歴史を築く事だ

ゾクッ

ゲリピアッ

それを成就するべく――

お前は究極を超える強さであらねばならない

うぐ…ッ!?

バリバリッ!

ミィ！

ズバッ

ズバッ

ゲモッ

ゲモモッ

…ッ！

パ…パ
これは――

――これまで
様々な実験を
行って 知り得た
ものがある

力の抑制を解く鍵は
『理性の超越』に
あるという事だ

この施術装置は
あらゆる〝刺激〟を
際限なく与える
事により

深層心理に潜む
〝獣〟を覚醒させ
脳のリミッターを
解除する

今こそ…
お前は理性という
縛めを解き放ち
真に最強の存在と
なるのだ――

ひぅ…ッ！

!!ッ
こ…れ触れた所溶けてッ…!?
いやッ…！いやぁア――
!!…あ
はぅ…ッ
んぅッ!!
ッ…そん…な…
コス…チュームが――…！
――喜べ亜衣

屈辱と被虐性感に塗れる
悪の女幹部の調教開始!!
小説／NOVEL 千夜詠（せんやよみ）
挿絵／ILLUSTRATION ねむ
黒き猛犬
レイファング
美脚に踏み躙られるヒーロー

くつば科学研究所、午前二時――都心から車なら一時間ほどの距離にあるここに、搬入されているのは、マイクロブラックホール発生装置のプロトタイプである。

町工場が偶然完成させたこれを共同研究する為に運ばれたのであるが、無論、この情報は秘密裡とされている。

しかし、どんな手を使っても世界征服を成そうと企む輩の情報網を甘くみてはいけない。

轟く爆発音、立ち昇る炎柱、叫びが木霊し、重傷を負った警備員が倒れ込んだ。

万が一に備えて警護にいた警官がリボルバーを取り出し、闇に浮かび上がる異形に向かって発砲する。

「化け物め、このっ、この……」

金属が弾かれる音がして、奴は平然と歩み寄ってきた。

まるで、子供の頃に見た特撮ヒーローに現れる怪人、二足歩行に進化した甲虫のようなそいつは、背中の羽を開き、一気に距離を詰めてくる。

頭部の角がみぞおちに突き刺さり、血反吐を口から飛び散らせながら、警官は地を転げた。

「大人しく渡せば無用な怪我などせぬものを……」

怪人の胸に刻まれている紋章は、地獄の門。世界征服を目論む悪の組織、カオスゲートを示す物だった。

侮蔑にも見える瞳で警官を見下ろした怪人は、目的の装甲車に向かって進路を変える。

「待て……」

職務をまっとうしようと警官は腕を伸ばすが、もう立ち上がる力は残っていない。

誰か、奴を止めてくれ――霞んでいく視界の中で、彼はそう願った。

「その役目、俺が引き受けた」

装甲車と怪人の間に一人の青年が立ちはだかった。黒革のジャケットを着て、顔はよく見えない。

怪訝そうに怪人も立ち止まった。

「何者だ」

「知らないはずはないだろう。お前達、悪の宿敵を」

「何？　まさか、貴様⁉」

青年は口角を上げ、直後、腕を振り上げて叫ぶ。

「闘着――レ――――――イっ、ファ――――――ング！」

天空より放たれた一筋の光が闇を切り裂き、青年に降り注ぐ。その眩さに一帯が白に染め上げられ、閃光の中に現れしその者は――。

「ぬおおっ、現れよったか、レイファング」

悪を穿つ漆黒のヒーロー。アスリートのように鍛え抜かれたシャープな肉体をナノマシンスキンで包み、ドーベルマンを模した仮面で素顔を隠した正義の戦士。

「絶望を切り裂く牙、レイファング、断罪の力、ここにあり」

幾度となく辛酸を舐めさせられた相手を前に、苦々しく唸る怪人が、ヒーローへと飛びかかっていく。

剛力の腕を掴むレイファング。

「ヒートマッスル！」

彼の全身が赤く燃え上がり、倍化した身体能力で、引き千切ると、高く上空へと跳躍した。

「猛牙光突脚！」

突き出した足がランス状の光を纏い、宙でありながら、多段階で加速を繰り返すレイファングの体。閃光と化し、甲虫怪人の胸部を突き抜ける。

ズガガガ――ッ！　全身機械仕掛けの怪人の内部が露出し、そこから火花が散っていた。

「こ、これ程の強さ……とは……」

背中で爆発音を聞いたレイファングは、近付いてきた消防とパトカーのサイレンの音を聞いて、立ち去っていく。

地位、名誉、金品、それを求めず、ただ正義の為に戦うヒーロー。その正体は謎に包まれ、だが、確実に人々の希望となっていた。

「へえ、あれが……レイファングね」

研究所ビルの屋上から、妖しい瞳がねっとりと絡み付くように彼を見詰めていた。

＊＊＊

バタバタと階段を駆け上がる音がして、ああ、そろそろか、と思うが、睡眠の誘惑にはまだ抗えそうにない。

バタン、と扉が開き、甲高い声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん、もう朝だよ、ほら、起きてってば」

いつものイベントであるから、もう慣れたものだ。だから、いつものように、

「あ、あと……一時間……」

と少しボケ混じりに言ってやる。

矛野雷雅（ほこのらいが）はこの後の妹の行動をよく分かっているから、しっかりと掛布団を掴んだ。案の定、剥しにかかられる。

「もう、アホな事言ってないで、おーきーろー」

「大学、今日は午後からの講義だけなんだ。もう少しいいだろ。昨晩のバイトも遅かったんだから」

「そんな、事言って、今、起きてこなかったら、絶対、後で後悔するからね」

高等部の二年生になる妹の凪沙（なぎさ）は、肩までに揃えた栗色の髪をした元気な女の子だ。その前向きな性格と素直さに、雷雅は救われている。

二人は幼い頃に両親を亡くし、施設で育った。そこは義務教育期間が過ぎると出ていかなくてはならなかったから、雷雅はアルバイトをしながら高等部に通う事にしたが、その時に妹もついてきたのだ。

家計的には妹が施設にいてくれた方が助かったが、逆に彼女のお陰でモチベーションがあがり、頑張ってこれたのだ。妹の笑顔に支えられて。

現在は高収入で特殊なバイトのお陰で、自分は大学にも通え、妹もお嬢様学校と呼ばれる女子校に入れてやれていた。こうしてちゃんとした一軒家に

著者近況　何年かぶりに、野球観戦に行きました。こちらが発売される頃には、日本シリーズのカードも決まっている頃ですね。

住む事もできている。
先に一階に戻った凪沙をゆっくりと追うようにして、大きな欠伸をしながら雷雅は降りていった。
寝癖もそのまま、くしゃくしゃのパジャマ姿で、ダイニングキッチンに入ると、
「おはようございます、雷雅さん」
艶やかな黒髪をツインテール状に二つ結わえた可憐さと高貴さを持つ、美少女がそこにいる。気品ある雰囲気に、それでいて優雅。しなやかな四肢に、紺色の制服の上からでも分かる女の子らしい丸みのある体付きのバランスがまた絶妙に美を構築していた。
「ユウリさん⁉」
威光坂ユウリ、日本有数の企業グループの創業家である威光坂の本家令嬢であり、凪沙の親友であった。妹が有名お嬢様学校でも上手くやっていけているのは、彼女のお陰であると言える。
——うわあ、何で、ここにユウリさんがいるんだよ！　しかも、我が家のキッチンに立って。
真っ赤になって、慌ててしまう。
「ごめんなさい、勝手に使わせてもらって……、ご迷惑でした？」
「い、いえ、そんな事は……」
クスッと笑ったユウリだったが、視線が雷雅のパジャマ下に向かうと、ポッと頬を赤くする。
——し、しまったぁ！
まだ朝立ちしたままであった。
「ト、トイレ、行ってきます」
あまりに慌て過ぎていて、ドタンと転ぶ。
すると、心配してユウリが駆け寄ると、制服のまましゃがむものだから、倒れ込んだ雷雅の目の前に、ＪＫの生足が飛び込んできた。
「だ、大丈夫ですか？」
「あ、あわあああ……、大丈夫ですぅ」
トイレに駆け込んでもドキドキが止まらない。脳裏に焼き付いてしまったのは、令嬢の新雪のように白い脚部の肌。ぷにっとした脹脛に、むちっとそそる太股から、ほんのりと甘い香りを感じてしまった。
——ああ、い、いかんぞ、俺ともあろう者が、破廉恥な目で彼女を見たりしちゃ……。
苦労して用足しを済ませ、朝食の席につくと、凪沙が種明かしをしてくれる。
「いや、つまりね、我が家の現状、いや、惨状を話したら、ユウリちゃんが、朝食を自分にも作らせてって」
で、こっそりと耳打ちされる。
「ほら、起きてこなかったら、後悔してたでしょ。お兄ちゃん、ユウリちゃんの事、ちょっと気になってるでしょ」
「バ、バカ……」
何を話されてるのか、分からぬまま、微笑むユウリの事を真っ直ぐに見られなくなってしまう雷雅だった。
＊＊＊
ヒーローってカッコいいね。私達の所にも来てくれたらいいのに——妹の涙ぐんで発したその言葉は、虐めっ子に泣かされた後の事だった。
だから雷雅は捨ててあったお面を被り、施設の年長者に挑んだ。妹が取り上げられたお菓子を取り返す為に。
二人きりの家族。凪沙を守る為に始めたそれが、今の彼を作っている。
お兄ちゃんが私のヒーローだよ——
その言葉を胸に今日も叫ぶ。
「闘着！　レイファング」
スカウトをされたのは三年前、大学への進学を経済事情から諦めていた頃だ。
小遣い稼ぎに運動部の助っ人をしていた身体能力の雷雅は、地域ではちょっとした有名人だった。そんな彼に声をかけてきたのが、特務機関ロウスカイ。
悪の組織の動きをいち早く察知した政府の直轄であり、構成メンバーも全て秘匿されている。カオスゲートの報復を防ぐ為だ。
勿論、家族にも秘密にされ、雷雅の高収入のバイトの正体がこれである。
来日した要人の誘拐の企てを未然に防いだレイファングは、怪人を追って、港の倉庫街へと入り込んだ。
「おのれ、またしても……」
ロブスタータイプの怪人の片腕は既にレイファングによって破壊されている。全身がショートして、火花が散っていた。
「さあ、止めだ」
怪人の殆んどが高性能の戦闘アンドロイド——学習型の人工知能を搭載し、感情も持っている——であるが、こうやって一体ずつでも倒していけば、カオスゲートの戦力も資金も削っていける。
——正義の為、凪沙が安心して暮らせる世界の為、俺は戦う。
高収入だけでなく、雷雅のモチベーションを保っているのがこれだ。
必殺の構えを取ろうしたその時、
「ああ、まったく、情けない」
透き通るような声が響き、コツンとした足音と共に、暗闇から一人の少女が姿を現した。
誰か——。
警戒心をあげて、視線を向けたそこには、
「な……っ⁉」
思いもよらぬ人物。見間違えるはずもない彼女は、威光坂ユウリであった。
学校帰りなのか制服姿のユウリの雰囲気はいつもの清楚な令嬢のものとは違っていた。全てを見下すような不遜な瞳で、異形の怪人を前に怯えなど皆無。むしろ、怪人の方が慄いている。
——どうしてユウリさんが、こんな場所に……。
現実感が無く、ただのショーの練習程度にしか思っていないのかもしれない。
「お嬢さん、ここは危険だ。直ぐに離れて」
こちらを一瞥すると、ユウリは不敵に笑みを浮かべ、次に視線を怪人に移

著者近刊
『言霊使いリザ 淫獄儀式の学園』『ナイトメアハンター愛瑠 夢魔狩りの乙女』『隷属ツンメイド 引っ越し祝いになってあげるんだからっ！』『俺の妹は中二病デレ 吸血姫な妹に吸い尽くされちゃう！』他
好評発売中！

した。
「貴方、機械帝の所の一級怪人だったわね。はん、それがこの様とは……、彼も苦労するわね！」
膝をついた怪人の頭をユウリは踏みつける。
いったい、どういう事なのか？
ユウリがこちらに向き直った。
「お前がレイファングか、私の部下もよく世話になっている。どいつもこいつも、情けない連中で、お前も戦いがいがないでしょ」
「君は……いったい……？」
考えが纏まらず、だが、怪人がユウリに危害を加えようとしていないのだけは分かった。
「そう、お前と対峙するのは初めてだったわね。混沌の力よ、我が下へ」
小さな竜巻が彼女を包み、一帯が刹那、漆黒に満ちる。闇球が形成され、胎動が鳴り、そして弾けた。
「我が名はダークネイル、支配の頂点に君臨せし黒の女王」
首領を差し置いての、恐れ知らずの口上を発し、彼女は現れる。
闇色の革の着衣、胸元の双球が半分だけ隠され、小さな黒革のショーツも大胆な露出度の高い物だ。黒のグローブと高いヒールのブーツを身に着けている。
髪は銀色に変わり、別人の印象に最初からこの姿であったら、ユウリとは気付かなかっただろう。
「ダークネイル……、確か、カオスゲートの四幹部の一人……」
「ええ、知っていてもらえて嬉しいわ。気軽にネイル様と呼ぶ事を許します」
踏みつけられながら腰を振っている怪人が爛々と瞳を輝かせていた。
「ああ、ネイル様ぁ……」
「お前には許してない！」
蹴り上げられた怪人が転がって、そのまま海に落ちていった。
「こほん、さあ、殺り合いましょう。んっ、ふふ……、レイファング、お前の力を見せて、そして私を滾らせて。感じさせてよ！」
瞬時に詰め寄った彼女の爪先が頬を掠める。咄嗟に避けなければ、まともに喰らっていた。
「く……っ」
これまで戦ってきた怪人とは動きがまるで違った。
――速い……。四幹部のうち、一人は人間だったはず。その一人が、確か……。
女幹部ダークネイルがそのはずだ。しかし、この動き、とても人間業とは思えない。
レイファングは防御一辺倒になってしまう。一つは、彼女が人間である事への躊躇。一つは、その正体が妹の親友であり、自分も密かに気になっていた少女である事への戸惑い。
「舐めてるの？　どうして攻撃をしてこないのかしら」
「うぐ……、や、止めるんだ。君は、こんな事をする人では……」
「お前が私の何を知っているというの？」
手刀の連撃をかわし続けるが、不意に放たれたハイキックの太股に、ほんの一瞬、瞳が釘付けにされ、直撃に脳天が揺さぶられた。
仮面が破壊され、何度も地に叩き付けられ、そのまま倒れ込む。
――まずい……、全身が痺れて……。
つまらなさそうにダークネイルが近寄ってきた。
「おかしいわね。お前の力はこんなものではないでしょう。ん……!?」
意識が遠のいていく中、一転して歓喜するようなダークネイルの声が聞こえてくる。
「まさか、こんな……、ああ、そうだったのね。だから……、んふふ、あはは……、いいわ、面白いじゃない。レイファング、やっぱり、お前は、私の期待を裏切らなかった」
恍惚とした彼女の表情を見て、それから気を失っていった。

＊＊＊

眩いスポットライトの光を浴びて、雷雅は目覚めた。レイファングに変身していられるタイムリミットを過ぎていた為、ごく当たり前の青年の姿がそこにある。
ただし、全裸にされて、椅子に座らされ、両手は背もたれの後ろに、両脚も拘束されていた。
――何処だ……ここは？　捕まった……のか？　って、何で、裸に！
四方がコンクリートの壁に覆われた簡素な部屋だった。天井に空調設備はあったが、窓はなく、昼か夜かも分からない。
「お目覚めね、レイファング。それとも、雷雅さん、と呼んだ方がいいかしら」
正面にいたのはダークネイル。その正体が妹の友人と分かったからには、敵愾心を剥き出しに睨む事もできなかった。
「……まさか、本当にユウリさんなのか？　いったい、どうして……」
羞恥心を隠してはいるが、舐め回すように裸体を見詰められると、視線だけで擽られているような感覚が湧いた。
「ええ、私はお前の知っている威光坂ユウリであり、カオスゲートの女幹部、ダークネイルでもあるわ。まあ、知られてしまった以上、特別に教えてあげる」
嗜虐的な瞳を輝かせながら、一歩、彼女は近寄ってくる。そこに濃厚に含まれた妖艶さに一瞬、吸い込まれそうな気分になった。
「お前の疑問は、威光坂の令嬢である私が、どうして悪の組織に加担しているか、という事でしょ。簡単な事、威光坂グループは、カオスゲートに資金提供を行っているのよ」
「馬鹿な！」
肘掛けの部分に彼女はドンと足を乗せてくる。戦闘で汗ばんだ肌の香りとむっちりとした太股が間近に迫って、

つい瞳がそこに集中してしまう。
「そうかしら。世界が混沌とするほどに、儲かる企業も多いのよ。まあ、私はお金には興味ないのだけど」
足を下ろすと、ダークネイルは椅子の後ろに回り、背後から顔を寄せてきた。
——ち、近い……。ユウリさんの顔が、と、吐息が……。
彼女の呼吸の音が鼓膜を震わせてくる。
「んふふ、私はね、カオスゲートの理想に共感しているの。温暖化、環境の破壊、民主主義のもたらしたのは、愚民の我儘を許した事だけ。やはり、優れた支配者による統治こそ必要なの」
「そ、そんな事は——、うわっ！」
伸びてきた彼女の指先が雷雅の乳首をなぞってきた。ゾクッとする刺激に身が硬くなる。
「あらあら、敏感ね。いいえ、美しく、強き者に支配されてこそ、愚民は真の幸せを感じられるはず」
指先から与えられる性感に、乳首が小さく突起する。すると、ぎゅっと摘まれてしまい、雷雅は唇を噛み締めた。
「ふぁあ！　や、やめ……。ユウリさん、君は、本心から言っているのか？　せ、洗脳されて……」
「ぷっ、あはは……、ああ、ごめんなさい。日頃の私からすれば、そう思ってしまうわよね。でも、違うわ。こっちが、本当の私……。自分から、望んで、カオスゲートに入ったの」
耐えられない痛みになる直前の絶妙な力の込められ方で、転がすように乳首が嬲られていく。
「く……、じゃあ、俺や、凪沙を騙して……」
「やだ、勘違いしないで。凪沙は大切な親友よ。レイファングの正体が雷雅さんだなんて、思いもしなかったもの」
ペチャっと伸ばされた舌で、首筋が舐められた。
——ユ、ユウリさん⁉　い、いや、こいつは悪の女幹部なんだ。しっかりしろ、俺……。優しい顔をして、裏では平然と平和を踏みにじっていた……敵。
まだ信じられない気持ちはあったが、自分にとって一番大切な、正義と同じようにそれを愛する妹を裏切っていた彼女を許すわけにはいかない。
「だからといって、君のしている事を認めるわけにはいかない。正体を知った以上は、正義の信念の下、必ず君を断罪する」
「あら、そんなカッコいい事言って……、でも、オチンチン、そんなに大きくして言われても、説得力ないわ」
「な……」
雷雅の男根は亀頭をパンパンに膨らませ、茎に血管を浮き上がらせ、天井に向かってそそり立っていた。
「み、見るんじゃ——」
「なぁに、見られたら、もっとビンビンになっちゃう？　正義のヒーローが、敵の女にチンポ見せて、興奮？」
悔しさと羞恥に食い縛るのに、ピクンと肉棒が跳ねてしまう。
「こ、こんな所に閉じ込めて、いったい何が目的だ？　ここが、カオスゲートの拠点というわけはあるまい」
「そう、ここは私のプライベートスペースの一つ。安心なさい、高貴なる闇の女幹部が直々にお前を葬ってあげる」
背中越しにごそごそと動く音がした。これからいったい何をされるのか——ブレスレットさえ取り返せれば、レイファングに変身して、こんな拘束なんか簡単に解けるのに。
焦りと不安を覚えながら、窮地を脱する方法を思案していると、背後からいきなり顔に何かを被せられた。
「これは……えっ⁉」
「私の穿いていたパンツよ。どお、まだ温かいでしょ」
彼女が正面に移動する。
嘘偽りもなく、ダークネイルは下半身を剥き出しに、湿気付いた薄い恥毛と内に覗ける肉裂から濃厚に蒸れた女を匂い立たせていた。
——俺をからかっているのか？　いったい、何のつもりで……。
さっと顔を背け、瞳をぎゅっと閉じる。男子の興味と正義の心が鬩ぎ合い、辛うじて信念が押していた。
「あはは、どお、私のパンツの感触は？　とっても蒸れていたから、しっかりと匂いが染み込んでいるはずよ」
雷雅の顔面が、生々しい体温と甘酸っぱい匂いの残ったダークネイルの脱ぎたてショーツに覆われ、股座に当たるクロッチの部分が丁度鼻先に位置している。
——な……⁉　ユウリさんの穿いていた、パ、パンツ‼　俺の顔にっ……、うっ、凄い匂い……。
悪臭とは感じず、濃厚な牝粘膜の猥褻な香りがきつかった。そこに汗と微かな小水の匂いも混じり、ほんのりと湿っている。
「ふー、ふー、んっ……、こ、こんな悪戯は、や、やめろ……」
呼吸を止めるわけにはいかないから、たっぷりと鼻孔に飛び込んでくる。
これが彼女の股座に張り付いていた物だと意識すると、とうとう肉棒の先端からカウパーが滲み出てしまう。
「んふふ、これじゃあ、別のヒーローね。何て言ったかしら？　あはは、興奮しちゃって……変態」
「こ、興奮なんてしていない」
「じゃあ、これは何なのかしら？」
ブーツの先で、肉棒を突かれた。そこに漏れ出たカウパーが滴り、靴先を汚していく。
「う……、やめ……ろ」
「正義のヒーローが悪の女幹部にパンツの匂いを嗅がされて、屈辱？　いいえ、むしろ興奮ですかぁ。しておいて何だけど、流石にドン引き。ほうら、お前の童貞チンポ、悦んで、はしゃいで、ビクビクしてるじゃない」
顔を真っ赤にさせながら、つい、逸

物を嬲ってくる彼女の脚を見詰めてしまう。
「ど、童貞って……」
「凪沙から聞いてるわよ。お前、女の子と付き合った事ないんでしょ？」
「そ、それがどうした……」
「どうせ一人でシコシコ慰めている童貞なんでしょう？　そのショーツをおかずにしてもいいのよ」
「ふざけるな！　そんな事するわけないだろう」
　ダークネイルは恍惚とした表情を見せる。
「いいわ、とってもいいわ。正直に告白したご褒美をあげる」
　ポンと雷雅の体が押され、椅子ごと後ろに倒されてしまった。
「いっ……つう……」
「鍛えてるんだから、このくらい何でもないでしょ。それじゃあ……」
　拘束された膝の間、椅子の座枠にダークネイルは座り込む。
　見下ろされる形になったが、気になってしまうのは剥き出しの鼠蹊部。むんっと熱く湿地帯のようなそこが、強烈に視線を誘導させてきた。
　ブーツを脱ぎ捨てるダークネイル。バランスよく肉付き、しなやかな気品を感じさせる脚の全容を見せられると、今度はそちに瞳が吸い寄せられてしまう。
「お前、脚フェチでしょ」
「ち、違う……、そんな事……」
「いつも、私の脚、舐め回すように見ていたじゃない。ほら、こうされると……」
　ブーツの中で温められていた蒸れた生足が、肉棒を挟み込んできた。
　――うわぁ、何だ、この柔らかさは……、ぬくぬくして、ああ、ダークネイルの足が、お、俺のを……。
　角質の微かなザラつきも、適度な刺激になって、男の一番敏感な部分を圧迫してくる。
　それだけじゃない。両脚で男根を左右から圧す為に、股間が大きく広げられていた。くぱぁっと肉土手の卑猥な亀裂が開き、間にあった肉芽が包皮を剥いて突起している様子さえ確認できてしまう。
「こ、こんな事……もう、止めてくれ、ユウリさん。君がこんな事をしていると凪沙が知ったら――」
「情に訴える作戦？　自分の心配をしたらどう？　悪の女幹部に足蹴にされて、興奮している変態脚フェチヒーローが、自分の兄だと凪沙が知ったら、どう思うのかしら」
　想像してしまった途端、ビクンと肉棒が痙攣を起こした。
「あはは、妹に変態趣味がバレた時の事を考えて、感じちゃった？　とんでもないマゾのうえに、歪んだシスコンぶりじゃない。ねえ、もしかして、凪沙に蔑んだ目で見られたいの？」
　流石に妹の事を言われては怒りが込み上げてくる。
「き、貴様……」
「反抗的な目ね。こうされても、その目が続けられるかしら」
　彼女の両脚が上下に動かされ、揺さぶられる肉棒に性的な刺激が注ぎ込まれてきた。
「うううう……、や、めろ……」
　カリ首の敏感な鰓が激しく擦られてきて、早くも衝動が湧き上がってきた。敵を前にして、みっともなく精液を出してしまう――それだけは避けたい。
「ぷっ、敵にチンポを足蹴にされてイっちゃうの？」
　嗜虐的な瞳を潤ませたダークネイルの強烈に牝を香らせる肉裂から、ねっとりと淫蜜が滴ってきて、睾丸まで垂れてきた。
　――ああ、エッチなお汁が、お、俺のにかかって……、女の子の愛液って、こんなに、出るものなのか？
　牝の発情オイルは肉棒を濡らしてきて、彼女の足裏との間に入り込む。滑りが良くなって、快感が強くなった。
　ぬぢゅ、ずりゅっ……。性悦と恥辱が同時に男根に擦り込まれ、息が荒々しくなってしまう。
「ふぅううっ、ふー、ふー、ま、負けない、おっ、んん……」
　温めた息で被されたショーツを湿らすと、また匂いが濃くなって、くらくらするほど鼻孔が刺激されてきた。
　――オマンコの匂いが……ぁ、す、凄い……、敵の足で、こ、こんな……ああ、ダメだ、うぐぅ……。
　ダークネイルの姿に普段のユウリが重なって見えてしまって、素直に興奮してしまいそうになった。
「さあ、出しちゃいなさい。敵の女幹部の足で、ザーメン噴き出すヒーローの姿っ、見せなさい！」
　ずりゅっ、ぬぢゅぬぢゅ――っ！
　カリ首を苛烈な動きで足が滑り、強烈に促されてしまう。
　悪から与えられる快感に身を任せてしまうわけにはいかない。拘束された上半身をくねらせ、全身から脂汗を滲み出しながら堪えるのだが、脳が悦楽に心地好く締め付けられ、
「くぁっ、で、出るぅ――」
　ドビュルッ！　ビュク、ビュクッ、ドプドプッ！
　ぎゅっと圧迫してくる可憐な足の中で肉棒は痙攣を繰り返し、濃厚な精液を勢いよく放っていった。
「あはぁ、きったなくて、くっさいザーメン……。さいてー、あはははは……」
　狂気じみた楽しそうな女幹部の笑い声を聞きながら、ヒーローは唇を噛み締める。肉棒は、萎えはしなかった。

＊＊＊

　乱暴に衣服が返され、そのまま解放されたのは、散々、精液を搾り取られた後だった。
　足と手、オナホールも使われ、もう一滴も出なくなった頃には、雷雅の瞳の下には濃厚な隈が浮かんでいた。
　コンクリート製の施設は廃工場の中にあった。そこから出ると、眩しい朝日に目を細めた。

野晒惺プレゼンツ
ロイヤル母娘丼38P

まだまだ朝まで時間はたっぷりとあります

あっ
ぱちゅ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱちゅぱっ
すみずみまで楽しませてもらいますよ

くっ…
プル
プル
うぅっ…
ズッ
ぐっ
ズッ
ズッ
女王陛下に王女様
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

あっ♥
んひいっっ♥
そこダメっ♥
あっ…
母上！今の私は本当の私ではありません！
こんな男のペニスにイカされるような女ではないです！
セラ王女は俺のチ■ポでイキまくってることは認めるんだ
セラ…あなたイキまくっているの？
そ…それはっあっ♥
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ビクッ
ビクッ
びくっ
びくっ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ギュポ
ギュポ
バチュッ
バチュッ
ビクッ
ビクッ
ひゃ

わ…私の意志ではなく身体が勝手にイってしまうんです！
私は淫らな女ではありません！
ズンッ
ズッ
パンッ
ビクッ
ピク
ブルルッ
ゾクゾク
んはっ
あぁんっ
セラ…今またイったわね
これだけよがっていては説得力ないぞ？
はひっ♥
だ…だめっ♥
またイクっ♥イっちゃう♥
パンッ
ビクッ

ガマンせず派手にイケ！
はひいいっ♥イキます♥
んはっ
熱いっっ
中出しでイクっ♥
次は普通にハメますか女王陛下
……
素直でよろしい
ああ…またたくさん出てる
確実に妊娠するぅ

あれはちょうど一ヵ月前のこと
母上…いえ女王陛下の名代として私がセミグ地方の巡察を？
私の生まれ故郷です
じっくりと巡って王位継承権第一位に相応しい見識を広めてきなさい
淫れ乱れし王女と女王
漫画COMIC／野晒惺（のざらしさとる）
にこ にこ
今セミグ地方は邪悪な魔術師が住み着いたとかで多少治安は悪いけど何かあればすぐに軍を差し向けるよう命令しておきますから心配はいらないわよ？
母上！
わ 私にそのようなご心配は無用です！

クスクス

そうね剣も魔法も国内屈指の腕前と師範たちから聞いてます

では準備でき次第向かいなさい

……かしこまりました

デールントと陛下に幸あらん

最近の母上はどこか私を疎んじられているような…

いや何を考えている！
父上亡き後のデールントをここまで強大にした尊敬すべき母であり女王なのに…
出立の準備急げ！
デールントに幸ねぇ…
日に日にあの人に似てくるわね……
フシッ！
私の祖国セミグを攻め滅ぼして妻とし無理矢理セラを産ませたあの男に
巡察は最少人数で向かう！
たぷんっ
グッ

止めろ！放せ！
私の命令に従うふりをして
偽りの降伏で騙し討ちをかけるなんて
元宮廷魔術師だったあなたがなぜこんな真似を
すぐに母上が捜索隊…いえ討伐対を派遣してくるわ
ツンツン
アセアセ
あなたもうお終いよ
むにむに
おかしな魔具のせいで思うように動けない…
さてそれはどうかな？時間をかけて儀式も重ねてきたし

セラ王女以外の兵は皆殺しにしたんでね
そう簡単にはこの場所を突き止められ…
き…気持ち悪い
擦りつけるな！
すりすり
ぐっ
ぐっぐっ
ふる
ふる
セラ王女！
ドキッ
くるっ
ガチャ
ガチャ
ガチャ
なっ!?
ご無事でしたか!?
まさか間に合うなんて！神に感謝いたします！
賊め！貴様は覚悟しろ！

女王め手順が間違っているぞ…これでは
一人だけ？
それも新米の？
まるで口封じ…

淫魔姫
フェーレース
小説／NOVEL 蒼井村正（あおいむらまさ）
挿絵／ILLUSTRATION 薄稀（うすき）
全てのオトコを魅了する
淫魔界のクイーン・フェーレース！

「……痴れ者ども、この私の加護を、そう簡単に得られるとお思いなら、それは大きな勘違いですわよ」

焦げ臭い白煙の立ちこめた石造りの空間に、高飛車な色合いを帯びた女の声が響く。

声の主は、メリハリの利いた肢体を、黒を基調とした扇情的なコスチュームに包んだ美女であった。

食べ頃サイズのメロンを二つ並べて詰め込んだかのような豊かなバストが、コスチュームの胸当てをはち切れさせんばかりに張り詰めている。

ウエストは細くくびれ、ヒップと太腿は、胸に勝るとも劣らぬ肉感を見せつけて、ムンムンと色香を放っている。

何処の国の美姫か？　と思わせる気品とオーラの持ち主であったが、彼女は人ではなかった。

やや赤みを帯びた頭髪の間から、緩やかにカーブした二本の角が伸び出ており、量感豊かな尻の辺りからは、黒く艶やかな革鞭のような尻尾が生え出て、宙でくねっている。

彼女は、人間たちに「淫魔姫フェーレース」と呼ばれている高位の魔族で、契約を果たした者に至上の快楽と強大な魔力を与える能力を持っている。

そんな女悪魔の加護を求め、召喚儀式を執り行う者も少なからずいたが、気まぐれでプライドの高い彼女と契約を結ぶのは至難の業であった。

「つまらぬ生贄、勘違いの契約書式……それだけならばまだしも、この私に対する無礼極まりない態度と物言い。結果、こうなって当然ですわよね？」

静かな中に、冷たい怒りの込められた女悪魔の声に応える者はすでにない。

フェーレースを召喚するために描かれた魔法陣の周囲には、消し炭状態となった人の残骸が散らばっている。

召喚には成功したものの、彼女の機嫌を損ね、その怒りを買った者たちのなれの果てであった。

「何人か逃げてしまったようですけれど、安易な考えで私を呼び出した者の末路を語る語り部役として、生かしておいてやりますわ」

冷酷な笑みを浮かべて宣言した淫魔姫は、フワリ、と身を翻し、魔界へと戻っていった。

「……はぁ……あれから何日経ったのかしら？　最近ははずれ続きですわ」

玉座の上で、退屈そうに溜息を漏らした淫魔姫は、目の前に置かれた水晶球を物憂げに見やる。

直径一メートルはありそうな、巨大な黒水晶の球体には、人間界における性エネルギーの波動が、淡いピンクの光として表示されている。

その大半は、人々が営む、ごく普通の性行為による輝きで、一瞬きらめいては消えてゆく。

「数ばかり多くて、質も量も貧粗なものばかり……そそられませんわ」

フェーレースにとって、食指のまったく動かぬ些細な波動は絶え間なく発散されているのだが、彼女を引きつけるような強い精気はここしばらくご無沙汰であった。

淫魔姫が待っているのは、淫魔召喚のための儀式による、輝き続ける淫光であった。

「そろそろ、満足のいく精気を吸いたいですわね……」

物欲しげな視線を黒水晶球に注いでいたフェーレースの目が、ひときわ強い輝きを捉えた。

明らかに、淫魔召喚を目的とした儀式魔法の光である。

「術式は丁寧で、生贄から発している精気も極上……これは、久し振りに当たりの予感がいたしますわね。私が待っていたのは、これですわ！」

妖艶な美貌に歓喜の笑みを浮かべた淫魔姫は、魔力を収束してゲートを開くと、精気の発源場所へと飛翔した。

ゴゴゴゴゴゴッ！

重厚な石造りの空間に、重々しい音を響かせながら、黒い煙の渦が生じた。

渦の中心から優雅に歩み出てきたのは、淫魔姫フェーレース。

「あら、これはなかなかに良き生贄ですわね」

召喚の魔法陣中央に鎖で繋がれた生贄を見下ろし、淫魔姫は艶然と微笑む。

腰布一枚の姿で仰向けに寝かされ、両手足を鎖で繋がれているのは、色白な少年であった。

突如、目の前に現れた魔族の美女を見上げる少年の顔には、明らかな怯えの表情が浮かんでいる。

「ほど良い育ち具合といい、細身で筋肉質な身体つきといい、怯えた表情の可愛らしさといい、生贄としては合格点を差し上げますわ」

久々に満足できる生贄の美少年に舌なめずりした女悪魔は、片手を一振りして結界を張る。

バシッ！　ビキビキビキビキィッ！

紫電をまとわりつかせた黒い半球状の結界がフェーレースと少年を包み込み、周囲から隔離した。

「周囲に何十人か野次馬が潜んでいるようですけれど、これで、何の邪魔も入ることなく楽しめますわね」

淫蕩な微笑みを浮かべた淫魔姫は、仰向けになった少年の傍らに、フワリ、と膝を着く。

「近くで見ると、顔立ちの愛くるしさが余計に際立ちますわね。可愛い子」

漆黒のガントレットに包まれたフェーレースの指先が、少年の頬を優しく撫でた。

「う……ぁぁ……」

生贄の少年は、拘束された裸身を、ビクッ、と緊張させ、小さく呻く。

「怯えることはありませんわよ。あなたには、至上の快楽を与えて差し上げます……」

色っぽくかすれた声で告げた淫魔姫は、少年の身体にのしかかり、薄い胸板に顔を近づけてゆく。

肉厚で妖艶な唇が肌に触れる前から

感じられるほど、少年の心拍数は高まっていた。
「んふっ、まずは味見を……ちゅっ、ぴちゅっ、れるっ……」
「ふぁ！　んうぅンッ！」
乳首を軽くひと舐めしてやっただけで、生贄少年の華奢な裸身が鮮烈な快感にわなないた。
心拍数がさらに高まり、引き締まった肢体が緊張を極めて汗ばんでくる。
「フフフッ、敏感ですのね。その反応も、精気の味も私の好みですわよ」
色香を煮詰めたような声で言った淫悪魔は、勃起を際立たせたペニスが股布を突き破らんばかりに盛り上がらせているのを横目で見つつ、反対側の乳首にも舌を這わせた。
「んふ……ぴちゅ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅぷっ……フフッ、可愛らしい尖りですこと」
温かな唾液に濡れた軟らかな舌先に舐め転がされた小さな乳首が、ムクムクと勃起してゆく感触を楽しんだ淫魔姫は、少年の引き締まった裸身にキスしながら下降してゆく。
「れるっ、ぴちゅ、んふっ、いいお味、身体も良く引き締まってますわね」
快感に強ばり震える腹筋の凹凸を舐め回し、臍の窪みに舌先を挿入して掻き回すと、腰布を突き上げた勃起が、ビクンビクンと派手に反応した。
「待ちきれないようですわね？　あなたのモノ、拝見しますわ」
勃起に突き上げられていた腰布が取り去られると、痛々しいほどにそそり勃ったペニスがビンッ！　と跳ね上がりながら露わになった。
赤みの強いピンク色の肉柱は、下腹にめり込みそうにガチガチに強ばり、紅色に充血した亀頭を張り詰めさせてヒクヒクとしゃくり上げている。
「期待していたよりも立派ですわね。色も綺麗で、太さや反り加減も私好みですわ」
淫魔姫のしなやかな指が、少年の勃起に絡みつき、硬度を探るように圧迫を加えつつ撫で回した。
勃起を握った指の輪を、根元から先端までゆっくりと上昇させ、亀頭冠の出っ張りで一旦停止させると、絡んでいた指をハラリ、と解いて、五本の繊指全てを揺らめかせて亀頭をまさぐる。
「く……うぅんんっ！　うぁ……あはぁうぅッ！」
ほのかに冷たく滑らかな指にペニスを撫でくすぐられ玩弄される快感に少年の顔が歪み、ピンクの肉柱がさらに硬度を増して、ビクンビクンと元気いっぱいに跳ね悶える。
「勃起から発する精気の波動も、純粋で濃厚……実にいい生贄ですわね」
満足げな声を上げつつ、緩やかに手首をくねらせて、硬く反り返ったペニスを扱き上げ、指の腹で亀頭を優しく撫で回し、愛でる。
「く……あぁぁっ！　もっ、もう……ダメ、ですっ！」
引きつった声を上げた少年の身体が硬直し、淫魔の指愛撫を受けたペニスが、射精寸前の痙攣を起こした。
「まだ弾けるには早すぎますわよ！」
少年が精液の放出を開始するよりも一瞬早く、淫魔姫が行動を起こす。
シュルルッ、ギチイイッ！
黒いなめし革のような尻尾が、ペニスの根元に巻きつき、暴発を封じた。
「くぁ！　あぁぁぁぁうぅんっ！」
今にも弾けてしまいそうな陰茎海綿体をギチギチと締め上げられた少年は、苦悶と喜悦の入り混じった声を上げ、汗ばんだ裸身を強ばらせる。
「少し敏感すぎるようですわね？　このままでは十分に楽しめませんから、少し下拵えをして差し上げますわ」
尻尾に巻き締められて震える勃起を撫で回しながら、淫靡に微笑んだフェーレースは、新たな術を繰り出した。
ツッ……ツツッ……コリッ、カリカリカリッ……。
黒い金属に包まれた女悪魔の指先が、張り詰めた亀頭に複雑な紋様を描きながら這い回る。
指の軌跡は、赤紫色に光る呪印となって勃起に刻み込まれていった。
「つぁ！　くふぅ……うぅぅッ！」
敏感な亀頭をコリコリと甘掻きされる痛悦入り混じった感触に、生贄の少年は不安げな呻きを漏らす。
「案ずることはありませんわよ。射精封じに加えて、強すぎる快感で心が壊れてしまわぬように感度抑制して差し上げているのですから……」
艶然と微笑むフェーレースの指先は勃起と、その根元で硬く引き締まった陰嚢にも呪印を描き込み、生贄を存分に貪るための下拵えを施してゆく。
「これでよろしいですわね。たっぷり楽しませていただきますわよ」
少年に馬乗りになった淫魔姫が、黒いコスチュームに包まれた股間に指を這わせると、その部分だけ股布が消失し、秘部が露わになった。
「う……あ……あぁぁぁ……」
露出した女悪魔の性器を凝視しながら呻く生贄少年の股間で、呪印を描き込まれた勃起が、挿入を待ちきれぬと言いたげに激しくしゃくり上げて下腹を打つ。
淫魔姫の性器は、女性経験皆無の少年をも魅了する、魔性の妖花であった。目にも艶やかなローズピンクの秘裂は、完璧に左右対称な小陰唇に縁取られ、ふっくらと丸みを帯びた大陰唇が肉感的な太腿の狭間で軟らかく身を寄せ合って、獲物を誘う食虫植物のごとき妖しいたたずまいを見せつけている。
カビ臭く湿った空間に、甘酸っぱく蠱惑的な淫魔姫の匂いが、フワリ、と漂った。
「ほおら、ごらんなさい。これから、この中にあなたのモノが入っていきますのよ……」
逆V字型の指で秘裂をヌラリ、と割り開いて見せつけながら、フェーレースは淫靡に微笑む。
「でも、その前に……」

気まぐれな淫魔姫は、ゆっくりと腰を下降させ、割り開いたままの秘裂を少年のペニスに押しつける。

きゅむ……くちゅっ……。

しっとりと潤んだ魔性のワレメが、呪印を描き込まれた勃起を挟み込み、圧迫した。

いわゆる、素股の恰好である。

「はぅぅ！　ンンンッ！」

熱く軟らかなワレメに挟み込まれた勃起を痙攣させ、少年は呻くが、射精封じされ、性感を抑制されたペニスは、暴発寸前の狂おしい状態を強制的に維持させられている。

「少し、焦らして差し上げますわ。そのほうが、精気も濃縮されてよりいっそうの美味に……ウフフフッ♪」

快楽の波動を主食とする淫魔は、肉感的な尻を前後に揺らし、素股責めを開始する。

にゅぷ……ずりゅっ、くにゅっ、にゅむっ、ぬちゅ、くちゅ、くちゅっ。

かすかな蜜鳴りの音を立てて、フェーレースの秘裂が生贄少年の勃起を擦り嬲った。

蕩けそうに軟らかく、火傷しそうに熱い魔性の媚粘膜が、はち切れんばかりに猛った肉柱に吸いつき、絶妙の摩擦快感を送り込みながら前後に滑る。

「くぁ！　あぁぁぁぁッ！　んあぁぁぁンッ！」

まるで少女のような声を上げた少年は、鎖で拘束された手足をばたつかせ、汗ばんだ裸身を捩らせてよがり悶えてしまう。

人外の愉悦を与えられた少年のペニスが絶頂し、ビクビクと制御不能の脈動を起こすが、精液の噴出は呪印によって封じられていた。

「心地良いでしょう？　呪印がなければ、この行為だけで、命果てるまで射精し続けていますわよ」

少年の上で尻を揺らしながら、淫魔姫は楽しげに微笑む。

「こうして接しているだけでも、熱く快美な精気が湧き出してきますわ」

秘裂に押し当てられたペニスが、絶え間ない絶頂痙攣を起こしているのを楽しみながら、フェーレースは語る。

「コレを私の中に迎え入れたら、どれほどの美味が味わえるのかしら？　楽しみですわね」

久々に出会った極上の獲物に舌なめずりしながら、淫魔姫は射精封じした少年の精気を焦らし、煮詰め、自分好みの味に濃縮してゆく。

「身体中、気持ちよくして差し上げますわ……」

素股責めを続けながら、両手と尻尾も駆使して、生贄の身体に人外の愉悦を送り込む。

「この、小さな乳首も感じるのでしょう？　ほおら、このように……」

薄い胸板の上で、ピンッ、と硬く尖り勃った乳首を摘んで揉み転がし、くすぐり、捻り上げ弄ぶ。

薄紅色の小さな尖りは、淫魔の技巧で摘み揉まれ、カリカリと甘掻きされ、指の腹で押し潰すようにしてグリグリと転がされる。

「くはぁんっ！　ンッ……くぅぅぅンッ！」

その一つ一つの愛撫が、少年にとっては絶頂の呼び水となる強烈な快感を送り込み、素股責めされているペニスが、射精を伴わない狂おしい脈動を延々と続けている。

「あなたのまだ知らない悦びも、教えて差し上げますわ」

クネクネと蛇のようにくねる女淫魔の尻尾は、放出を待つ精液ではち切れそうな陰嚢に巻きついて蠢きながら、その先端部を少年の肛門にゆっくりと潜り込ませてゆく。

「ふあぁぁぁ！　そっ、そこはぁ⁉」

不浄の穴を甘く抉られた少年は、裏返った声を上げ、尻の筋肉をギクッ！と強ばらせる。

「そう、一番恥ずかしい穴ですわね。男も女も、私にここを可愛がられると、歓喜に悶え狂いますのよ」

妖艶な声で言いながら、淫魔姫は少年の処女地を貫いていった。

ぬぷ……ずぷぷぷっ！

異物を受け入れたことのない肛門括約筋をジワジワと押し開きながら、槍の穂先のような形状をした先端部がくぐり抜けると、繊細なすぼまりは、キュッ！と収縮して、淫魔姫の尻尾を締めつける。

「あはんッ！　いい締めつけですわね。あなたのお尻の穴、なかなかの名器ですわよ」

性器に等しい感度を持つ尻尾を締めつけてくる括約筋の感触に、甘い声を上げたフェーレースは、淫らな笑みを浮かべ、少年の尻を犯し始めた。

ずりゅっ……ぐりっ、ぐりっ、ぐにゅるっ、ぬちぬちぬちぬちっ……。

挿入された尻尾は、勃起の根元を裏側から押し上げ、緩やかな円を描くように動いて、前立腺を揉み責める。

「ほおら、気持ちいいでしょう？　ここを可愛がられると、男でも、女の悦びを味わえますのよ」

妖艶な笑みを浮かべた淫魔姫は、尻尾を巧みに操り、背徳の快感を少年の尻に送り込み続けた。

「ふあぁぁぁ！　あ……あっ、あぁぁぁぁッ！」

泣くような声を上げた少年の身体が、ひときわ強い絶頂痙攣に包まれるが、頂点である射精は封じられている。

抑圧された絶頂感は生贄の体内で渦巻き、濃縮されて、フェーレースが好む極上の美味へと醸成されてゆく。

「んはんっ！　あんッ、あなたのモノ、凄く力強く跳ねていますわよ」

放出できぬままのペニスが、騎乗位で素股責めしているフェーレースの身体をはね飛ばさんばかりの勢いで脈打ち、淫魔姫の性器を刺激して、高貴な美貌を喜悦に歪めさせた。

「そろそろ頃合いですわね。あなたの精気、吸わせていただきますわ」

入念な下拵えを終えたペニスに指を

著者近刊　『ウィッチ＆エッチ　クールな魔女をマゾ調教してみた』『呪詛喰らい師１～３』『対魔忍ユキカゼ　対魔忍魔調教に堕つ』『もののふガールズ１～２』他　好評発売中！

添え、挿入角度を調整したフェーレースは、愛液に濡れた膣口へと亀頭を導き、ゆっくりと呑み込んでいった。
くちゅ、にゅぷ……ずぷぅぅうっ！
呪印を刻まれた勃起が、淫悪魔の膣口に根元まで吸い込まれる。
「はあぁぁぁぁ～ンンンッ!!」
甲高い絶頂の声を上げた少年の身体が、フェーレースを乗せたまま弓なりに仰け反り、痙攣した。
「ウフフフウッ♪　いい反応ですわ。これから存分に搾って差し上げますわね」
仰け反り硬直した少年の上で、巧みにバランスを取った淫魔姫は、ムッチリと張り詰めた太腿を躍動させて、ペニスを貪る淫靡な上下動を開始した。
ぬちゅっ、じゅぷっ、ずちゅずちゅずちゅぬちゅぬちゅぱちゅぱちゅぱちゅんっ！
卑猥な蜜鳴りの音を立てて、女悪魔が少年を犯す。
射精封じされたペニスをスッポリと咥え込んだ淫魔の膣壁は、締めつけ、ざわめき、軟らかな肉襞を渦巻くように蠕動させて、生贄の肉柱から喜悦の波動を搾り出した。
人外の愉悦にペニスを包み込まれた少年は、声なき悲鳴を上げながら、拘束された裸身を捩らせ、全身の筋肉を脈打たせて、絶頂し続けている。
「んはぁぁ……いいっ！　いいですわ！　芳醇で純粋な精気が、私の中に熱く染み渡ってきますわよ」
高貴さと妖艶さが同居する美貌に喜悦の表情を浮かべ、フェーレースは尻を縦横無尽にくねらせる。
上下のストロークに前後の揺動や円を描くようなグラインドも混えた腰遣いでしゃぶり立てられた勃起は、限界を超えて張り詰め、休みなく脈打って、淫魔の膣内に濃密な快楽波動を放ち続けている。
激しい尻振りの反動を受けて、フェーレースの爆乳も揺れ弾み、黒い胸当てから白くたわわな果肉が今にも飛び出してしまいそうだ。
「ほおら、いかがかしら？　これが淫魔との交わりですわよ！　命と引き替えにしても、惜しくない心地良さでしょう？」
膣奥深くに呑み込んだ勃起の先端を子宮口で吸いついばみ、肛門を犯す尻尾の動きを早めて背徳の絶頂を与えながら、フェーレースは淫靡に舌なめずりする。
「くはっ！　はひッ……ヒッ……カハッ……あはぁぁ……ッ！」
生贄の少年は、過剰な快感の嵐に揉まれて体力を根こそぎ奪われ、絶息寸前の喘ぎを漏らすのが精一杯だ。
「もう少し楽しみたいところですけれど、射精する前に命果ててしまっては、せっかくの下拵えが無駄になってしまいますわね……」
生贄の体力が限界に近いのを悟った淫魔姫は、わずかに名残惜しい感情を覚えつつ、醸成された精気のエキスを飲み干すことを決意した。
「さあ、その命の全てを喜悦の波動に変えて、私の中に注ぎなさい！」
後ろ手に回した手で、少年の陰嚢を鷲掴みにして魔力を込め、ペニスに掛けていた射精封じの呪印を解除する。
「フウアアアアアアアア～ッ!!」
ようやく射精許可を出された少年が、断末魔のごとき声を上げてグンッ！と腰を突き上げ、放出を開始しようとしたその瞬間……。
ジャラッ！　シャラララララッ！
金属の鳴る軽やかな音を立てて、少年の裸身から虹色に輝く鎖が何本も伸び出てきた。
「え？　なんですの、これは!?」
驚きの声を上げて身を離そうとするフェーレースであったが、彼女の膣内には少年のペニスが深々と挿入されていて、思うように動くことができない。
ジャリッ！　ギチッ、ギチュッ！
少年の身体から出現した光る鎖は、淫魔姫の身体中に絡みつき、緊縛してゆく。
「まさか、これは、罠!?　そんな、この私が看破できないなんて!?」
驚き抗うフェーレースの両腕が封じられ、ムッチリと肉の乗った太腿が縛られ、ウエストとたわわなバストにも光る鎖が巻きついて締め上げる。
ギチュッ！　ムギュルッ！
「くは！　はぁぁんっ！」
悩ましげな苦悶の声を上げるフェーレースの爆乳が、らせん状に巻き締められ、歪に変形させられた。
「こっ、こんな鎖など、引きちぎってやりますわっ！」
怒りの形相を浮かべた淫魔姫は全身に力を込めるが、光る鎖はビクともせず、それどころかさらに緊縛を強めてくる。
チュルルッ！　ギチギチギチッ！
「くぁ！　あぐうぅぅぅうんっ！」
高貴な上級淫魔にあるまじき苦悶の声を漏らすフェーレース。
「力が抜けてゆく……。この鎖には、私の魔力さえも封じる効果が!?」
身動きの取れなくなった淫魔姫の身体が横倒しになり、射精に到達できなかった少年のペニスが、チュポンッ！と間の抜けた音を立てて解放された。
「あぁぁ……結界が……解けるッ！」
ビシイッ！　パアァァンッ！
邪魔が入らぬように張っていた黒い半球状の結界も、シャボン玉が爆ぜるように消え去ってしまう。
「フハハハッ！　やった！　やったぞ！　三年がかりで仕込んだ、アルスノウワの縛鎖をもって、淫魔姫フェーレース捕縛に成功せり！」
石造りの空間に哄笑を響かせながら姿を現したのは、黒いローブに身を包んだ男であった。
彼の背後には、同じような恰好をした連中が数十人、付き従っている。
「かつて、数百体の上級悪魔を従えたという伝説の王が用いた縛鎖の魔法、気まぐれなる淫魔姫として恐れられた

うわぁ!!

グフフフ 愚かにも希望にすがる人間どもめっ

怯えろ人間ども捻り潰してやるぞっ

た 助けてえっ!!

ぎゃあ〜っ

あ あれは幻魔…ッ!!

2体同時に相手なんて…やったことないけど…

それも2体も!?

でも守らなきゃ…皆の希望を!

変身っ!!

陵辱リビドー溢れる著者初単行本
『堕ちる時はメスの顔』好評発売中!

ルーチェ・アンジェロ参上!!!
希望の光を消そうとする幻魔達っ
このルーチェがそんな事許さないんだから!!
おぉルーチェだ！助けに来てくれたっ
これでもう安心だぜ！
覚悟なさいっ
力が湧いてくる…
ガッ
てやぁっ!!
グガガガッ
皆の希望が私の力になるっ
白く濁る希望の光
漫画 COMIC／ジンナイ

皆の希望は…私が守るっ！
スペランツァフルスタ!!!
ぎゃあああっ
やった…
助かった…
ふふふ
勇ましいですねぇ…
お前は…エルムッ！
そう簡単に思い通りにはさせませんよ
起きなさい幻魔達よ！

なっ!?

そんな…復活したっ!?

こんなこと今まで…っ

捕まえたぞルーチェ・アンジェロ

貴女の活躍のせいで我々の目的が果たせないことが増えましてね

そのお礼を…してあげますよ

くっ…はな…してっ!

人間達の希望が力の源になる貴女によいことを教えてあげましょう

ななにをするつもりなのっ!?

なにも幻魔から守られるだけが人々の希望ではありませんよ

なにを言って…

人々の欲望を…性欲を満たしてやればそれも希望になる

ひゃっ

やめ…っ

でたらめをっ

うわ…

希望の戦士が淫らに堕ちる姿などさぞ人々の性欲を満たすことでしょう

そんな…

人間達の下衆な欲望…

貴女の羞恥…

大変心地よい

いいや…見ないでっ

人々に見られながら弄ばれる気分はどうです？

ッ!?

さあ もっともっと欲望をさらけ出すのです！

いやあぁっ!!

おぉ…ルーチェの生おっぱいだ!!

やめなさいっ

こんなことで…私は希望を…

うそ…

だめ…力が…皆の希望が消えてしまうっ

さすが人々の希望いやらしい胸をしていますねぇ?

いやっ

観衆達も貴女のもっと淫靡な姿に期待しているようだ

期待には応えなければいけませんね

は放しなさいっ

なんで…こんなことにっ

もっともっと…

滅茶苦茶にしてあげますよ

ハッ
いゃぁそこ…
おっぱいダメェ!!!
ちぁあああ
ビーン
人々の希望が
膨らんでいってるのが
分かりますか
ハッ
貴女の乳首も
コリコリ硬くなって
きましたね
コリコリ
ふぁあっ♡
期待してるの
ですか？
ルーチェって
いい身体してるよな
すっげぇ…
そうそう…
おっぱいでっけぇし
でっけぇ乳が揺れて
ちょーエロい
フフフ 皆さん
貴女が堕ちる姿を
心待ちにしていますよ
そんな…ことないっ

限界を超えて求めたのは――
小説／ぽいぽい
NOVEL
挿絵／みやねあき
ILLUSTRATION
最終話 魔に捧ぐ純潔
魔を祓う神巫
宮道京香の寝取られ退魔帖
くどうきょうかのねとられたいまちょう

登場人物紹介

宮道京香

負けん気の強い退魔師で一族の掟である『初夜』を控えている。幼馴染みの遼祐に対して中々素直になれない。

御門遼佑

細かいことは気にしない竹を割ったような性格の好青年。京香とはよく喧嘩になるが戦闘での息はぴったり。

狭間若彦

京香のよき理解者である叔父。整体院を営んでいる。今は亡き京香の母に恋心を抱いていたが……。

前号までのあらすじ　淫紋が疼く京香は連日の陵辱から一転、放置プレイによりさらに苦しめられ、無意識に他の男に抱かれているときのことを思い出してしまう。そして遼祐とやっとの思いで距離を縮めるも初めてのような演技をしながら貴めたててしまう自分に嫌悪し……。

「ハァァァッ――！」

気勢を上げる京香の声が街郊外の薄暗い林の中でこだまする。

月明かりの下で幻惑的な巫女装束をたなびかせる退魔少女を、無数のぶよぶよとした気味の悪い妖魔たちが取り囲んでいた。

「こ、のぉっ……！　次から次に……！」

普段なら数瞬で灰塵と散らすような雑魚妖魔なのに――額から流れる汗を拭う間もなく京香は次の獲物目がけて疾駆する。

禊を終えたばかりの清浄な身体は、既に触手妖魔たちの体液と京香自身の汗とでドロドロだった。ぴっちりと張り付いた神聖な衣装が、艶めかしいボディラインの躍動をこれでもかと強調してしまう。

（やっぱりさっきのアレのせいで……身体が思うように……っ）

同じく妖魔の気配を追って今は別の場所で戦っている遼佑のことを思うと、我知らず身体が火照りを帯びてくる。

何日もの間淫紋にじわじわと炙られ、ようやく解放されると期待した遼佑との一時は、結果として京香の身体をさらなる欲情状態に導いただけだった。

ビシィッ――！

「くううううっ……！」

（こんな雑魚妖魔の攻撃を受け止めるだけで……！）

鞭のようにしなる触手を聖棍ではね返しながらも、京香の膝がガクリと折れる。聖棍から伝わる振動がそのまま身体の奥を揺さぶるようだった。

（うあ、ああっ……ひ、響く……遼佑に撫でられたアソコが、ジンジンするぅ……！）

戦う前から弱り果てている退魔少女に、好機とばかりに雑魚妖魔たちが襲い掛かる。

「こ、こいつら――うあああっ!?」

精彩さを欠いた京香に、四方八方から襲い掛かる縄触手をいなす術はなかった。死角から回り込んだ触手が獲物の隙を目がけてギラリと煌き、鞭のようにしなった触手が鋭く空を切ってバチンと京香の臀部を打ち据えた。

「カ、……ハッ――!?」

膝丈の紅袴の上からしたたかに打ち付けられた鞭が、京香の柔肌をひしゃげさせる。ひとたび体勢を崩した退魔少女の肢体に、怒涛のごとく縄鞭が降り注ぐ。

バチンッ！　ドシュッ、ドッ、ズドォッ！

「がっ、あァっ!?　あぐっ！　うあぁぁぁっ――！」

神聖な紅白の巫女装束から露出した太ももや華奢な細腕に、次々に刻まれる触手鞭の粘液痕。白磁の肌に痛々しい赤いミミズ腫れが彩られていく。

（こんなやつらに……こんなやつらにいいっ……！）

天才退魔師と呼ばれた自分が、手も足も出ないなんて。

ネトネトと粘汁を垂らす触手鞭の雨を受けながら、けれど京香の身体の奥から湧き上がってくるのはプライドを踏みにじられる悔しさでも、屈辱的な状況を打開できない焦りでもなかった。

「あうっ、くぅぅ……んんっ、あっ、ふぁぁっ……！」

肺の奥から搾り出すようにまろび出てくる熱を含んだ甘い声――それが一体どこから聞こえてくるのか京香にはわからなかった。

「ひっ、んいッ――！　どこ、叩いて……うあっ、んんんああっ……！　や、やめろっ胸は……痛ッうううっ……！」

ぶたれるたびにブルンブルンとはね回る柔らかな乳餅に妖魔たちの攻撃対象が集中し始め、ようやく京香は意識する。蕩けた媚声を発しているのが自分だということに。

（う、うそだ……まさか、まさか私……っ）

ぬちゃあぁ……ぎちゅっ、むぎゅううっ！

「んんんンンあぁッ――!?」

獲物の抵抗が弱くなったのを見計らって、ヌメヌメの触手たちが蛇のようにまとわりついてくる。

乳房が生温かい粘液触手にぎちゅりと締めあげられ、まるでボンレスハムのように柔肉がくびれる。

（い、痛い……！　おっぱい、ぎちぎちに……搾られて……痛い、はずなのに……っ！）

言語も解さない雑魚妖魔にいい様に嬲られながら――胎の奥がムラムラと一層疼きを高めてしまっていた。

「はぁ、はぁ……うあぁっ!?　んぷっ、むああ……!?」

手足を縛り上げ、完全に獲物の身動きを封じた触手たちが京香の美麗な鼻筋をぬるりと這いずり回る。

妖魔に顔の上を汚辱されている。それだけで身の毛がよだつほどのおぞましさを感じるはずなのに――。

「や、やめ……ろぉ……！　ふぁ、んぅぅ……うぷっぇぇぇ……っ！」

ふるりと張った若々しい唇に、ほのかに上気した柔らかな頬に、ぶよぶよの触手亀頭が粘液を塗りた

くる。
ふいについさっきまで咥えていた遼佑の逸物が脳裏をよぎった。
（なにを考えているんだ、私……こんな、醜悪なものと遼佑のを……うぅっ！　今すぐ、滅してやる……跡形もなく、消し炭にして……！）
気丈な思いも頭の中に浮かぶだけで一度それと思ってしまえばもう頭から離れない。目の前で傘のように開いた触手亀頭をぼうっと見つめながら、口内にじわりと唾液が満ちていく。
ガシャン、と音がした方を見れば手にしていた聖棍が力なく地面に転がるのが目の端に映った。武器のなくなった無防備な発情女体へここぞとばかりに触手たちが殺到する。
「んむっ、むほおォォっ!?　おぶっ、ぢゅるるっ、ぶぶぉぉっ!?」
（いやだ……口の中、挿入ってくる……こじ開け、られるぅっ――!?）
妖魔にしてみれば、退魔師は天敵であると同時に極上の獲物だ。京香の身体から発される人為ならざる力を貪ろうと、小指の爪先までをもその粘汁で汚し尽くしていく。
（うえぇっ……臭いいっ！　ネバネバの汁……臭くて、気持ち悪い……気持ち悪いのに……あ、れ……？）
「むぢゅ、ぢゅるる……ぷぁっ、はふぅ……はふぅっ……ぷぁ……っ」
極太触手と唇の隙間から幾本もの糸触手が入り込む。京香の舌肉を搦めとり、頬を内側からズルズル這い回っては粘汁を塗りたくる。
敏感な口内をめちゃくちゃに蹂躙されているというのに――京香の表情から次第に力が抜けていく。
（は、はやく……こいつら……祓わないと……っ）
ぽっこりと膨らんだ頬には朱が差し、とろんっと眉尻が垂れ落ちる。地に着いた足はよろよろとふらつき、妖魔に身体を支えられていなければ立つこともままならなかった。
「ぢゅる……ちゅ、んちゅ……ぺろ……れろぉ……っ」
舌先にぷよぷよとした肉感がまとわりつく。否、まとわりつかせるようにして舌を這わせているのは京香自身だった。
（あま、い……ねばねばして、臭くて、汚いのに……甘くて、おいしい……っ♥）
どうしようもなく全身から湧き上がる欲情の波が理性を溶かしていく。遼佑にフェラチオ奉仕したように、気づけば妖魔の触手チンポをジュルジュルとしゃぶりだしていた。
「じゅる、ずずぅ……ぷはぁぁっ……!?　く、そぉ……こんな、こんなぁ――んふぁぁっ!?」
ちゅぽんっと唇をめくり返して触手が引き抜かれる。どうやら求めるものはそこにはないと気づいたらしい。と、同時に――、
にちゅ、ぢゅる、にゅろろぉっ……！
「あ、ああ……！　やめろ……そこは……っ！」
紅袴の裾がめくられ、露わになった純白ショーツの隙間にニュルリと柔らかな肉べらが這う感触。愕然とする京香を他所に、続けざまに数本の触手が太ももや尻房を捏ね回しはじめた。
「ん、くぅ……あ、ああ……！　触るなぁ……おし、り……っ！」
ぬちゃぬちゃと触手に揉まれる尻たぶが瞬く間に媚熱を蓄え、ツゥゥと珠玉の汗が柔肌を伝い落ちる。
当然、妖力を求める触手たちが〝そこ〟へ行きつくのにさほど時間は要さなかった。
ちゅぽっ……ツポ、にゅぽぽっ……！
「う、ああ……んひぃっ――!?　お尻はだめぇっ」
か細い悲鳴が京香の口から迸る。狭隘な尻の谷間を掻き分け、触手たちが不浄の穴の淵をツンツンと突いていた。
この半月、君彦や村瀬らによって完全な性感帯に開発されたその肉穴は、妖魔たちの弄手にぷっくり肉厚を増して淫猥に盛り上がっている。
（ま、まずい……身体中敏感になってるのに……おしりなんて、弄られたら――ッ！）
にち、にちゅ……くにゅくにゅ……くぽぁぁっ……♥
微細な動きで徐々に肛皺がほぐされ、極小の恥穴がやんわりとくつろげられていく。
「離れろ、この……このぉ……！　んぉっ、お、ぉぉ……だ、だめ……やめぇ……っ!?」
必死に手で遮ろうとするが粘液をまとった触手にはなんの妨げにもならず、うなぎのように手の間をすり抜けてしまう。
いつしか敏感な性感部位を丁寧にマッサージされているかのような心地に、半開きになった口からだらしなく舌先がのぞいていた。
あまりにはしたなくて遼佑には懇願できなかったお尻の穴――ぷっくり充血していやらしい快楽の蜜を溜め込んだ肉穴を、よりにもよって汚らしい触手妖魔によって犯されようとしている。それなのに、
「あ、あああ……！　ひ、開く……おしり、開いてしまうううっ……！　んおおっううっ……！」
ぞく、ぞくぞくんっ――！
野外で尻を丸出しにしている自分を思うと、京香の身体は早くも牝の匂いを撒き散らしながらどうしようもなく興奮してしまっていた。
何日も味わうことのなかった尻穴快楽を、本能が覚えていて勝手に求めてしまう。
「う、あ……ああ……ひ、ぃぃ……っ」
（だめだ……考えるな……！　こんなものでおなかの奥、掻き毟られたら――！）
そう考えただけで唾液が口の中で弾ける。

著者近況　ここまでたくさんの方々に助けられながら書いてくることができました。読んでくださった方、本当にありがとうございます。少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。

蕩けた京香の思考を汲み取ったように、ひときわ太い触手が開け広げになった肉穴にむにゅりとその亀頭を押し当てた。

ずぷ、ずぷぷ……にゅぷっ、ずにゅるるるっ！

「おんっぐうううう――っ♥」

有無を言わせず、まるでそれが当たり前だと言わんばかりに妖魔が肉壺を押し拡げるのと同時に、噛み締めた唇の隙間からあえかな悲鳴が迸った。

（は、挿入ってる……こんな、こんなおっきいのおっ――!?）

触手が身体を這い出したときから、無意識下で期待していたのは事実だった。徹底的にほぐされた括約筋はまるで抵抗もせずに異物を受けいれていく。

ぶよぶよの柔らかな肉感がヒクつく肛道をめくり返しながら、奥へ奥へと容赦なく掘り進んでいく。

「ん、おほおぅぅ……ぎち、ぎち……おひりっ、めくれへっ……おおっァァッ……!?」

何日もおあずけにされていためくるめくケツ穴快楽が全身に沁み渡り、思考が弾け飛ぶ。

ピンク色の腸襞を掻き毟られるたびに不快感など吹き飛ばすほどの肛悦が、びくっびくっと美しい肢体を躍らせた。

「ふ――っ……ひぅ――っ……！　くはぁぁっ……んお、おお……んっぐうううう～～っ！」

（こんなので……こんなのでぇぇっ……！）

気持ちよくなんてなるわけがない。そう自分に言い聞かせようとすればするほど、恥知らずの肉穴はぎゅっぎゅっと媚びるように触手を締め付ける。

（もしかして、私……無理やりされる方が、感じるのかも……っ）

そんな考えがよぎった刹那、それに応えるようにヌボッヂュボッと太い肉幹が徐々に京香の肉壺に収まっていき、みっちりと不浄の道をいっぱいに占領する――、

「なっ!?　なひ、を――んおおぉぉっ!?　ぐちゃぐちゃっ、おひりっかきまぜへぇぇっっ!?　や、やめっ――暴れりゅ、なぁぁっ！　奥れっ、ジュボジュボォッしゅるなっ……んおっほおぉっっッッ♥」

狭隘な穴の中でビチビチと鮮魚のようにはね回る極太触手。ここしばらく無沙汰だったおかげで元の形に閉じかけていた腸奥を一気に開花させられる。

（すごいすごい、すごすぎるうううっ！　頭のなか真っ白になるうう……だめぇぇ……くる、〝アレ〟がきちゃうううっ！）

京香の脳裏では、散々に覚えさせられた屈辱のアナルアクメの予兆が稲光を放っている。

「だめぇぇっ……それ、だけは……っ！　ふぐっ、ぬぅぅぅ……ひふぅぅぅっ！」

触手なんかで本気ケツアクメに達してしまう――それだけは避けなければと、残ったわずかな理性で歯を食いしばるが、

（どうして……どうして触手なんかでぇぇ……遼佑とのエッチじゃ、全然だめだったのにぃっ……！）

想い人と身体を重ねただけではついぞ達しえなかった絶頂に、こんなにも容易に辿りつきそうだなんて――それも排泄穴をほじくられながら。

恐怖とそれを上回る期待感、二人の悪魔に刻まれた牝の本性とも言うべき被虐欲求がむくむく膨れ上がる。

（そんなの絶対に認めないいいっ……認める、ものかああっ……！）

「も、もお……わかった、だろぉっ……！　なん、にも……そんなとこ、なんにも、にゃいぃぃてぇっ……！　だから、早く終われぇぇっ……！」

息も絶え絶えになりながら懸命に触手を引きずりだそうとする。だが口腔に侵入してきたときとは違って触手たちはなぜか執拗に京香のアナルを責め立ててくるのだ。

（な、なんでこんなにっ……しつこくうう……う、あ……!?　ま、まさか――！）

ジュボッジュボッ――ジュヌルルボボオオッ！

「おっおっほおおおおおおっ!?　ぐるっ、ぐるうううううっ!!　お、奥まで……いちばん奥まで、ずっぽりいいいいっ!?」

求めるものはまさにそこにあるのだと言わんばかりに、君彦たちにさえ侵されることのなかった直腸の先まで妖魔の肉槍がえぐり抜いてくる。

淫らな悦楽を感じるたびに京香の下腹で輝く淫呪――その元凶となっている蛇鬼に埋め込まれた刻球が、同じ闇の生物を惹きつけているのだ。

「こ、壊れひゅ……けひゅあにゃっ壊れるぅぅっ……らめぇぇ……こんにゃの、死ぬ……死んじゃうぅぅっ……っ！」

ぷちゃ、ぷちゃあっと股間の純白ショーツに溢れた蜜汁が広がっていく。

（あ、ああ……最低だ……最低、すぎるぅぅ……処女、なのに……触手でケツ穴いっぱいに詰められて……苦しくて、たまらないのにぃぃ……どうしようもなく感じてしまうぅぅ……っ♥）

死んでしまいたくなるほどの恥辱を受けているというのに、そんな破滅感さえも京香の心をさらなる被虐快楽で炙り立てる。

ずちゅっ、ずちゅんっ、ごちゅんっ！

「おっ、おほっ、んあああアッッ――!?」

（い、今なにかっ！　なにか奥でっ、ごちゅんってぇぇっ！）

大人の腕ほどに一直線に割り拓かれた腸奥で予想外の衝撃が起こる。と当時に――、

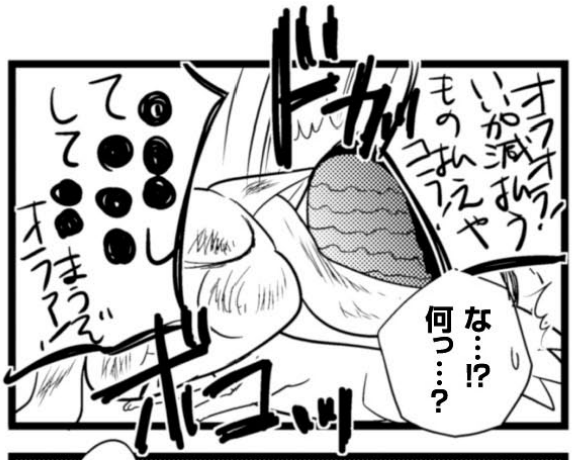
「な、なんらっ、なんらこれぇぇっ!?」

パァアアッと下腹の淫紋が熱く瞬いたかと思うと、京香の全身から一気に力が抜け落ちる。

（ま、まさか、まさかぁぁ……ッッ）

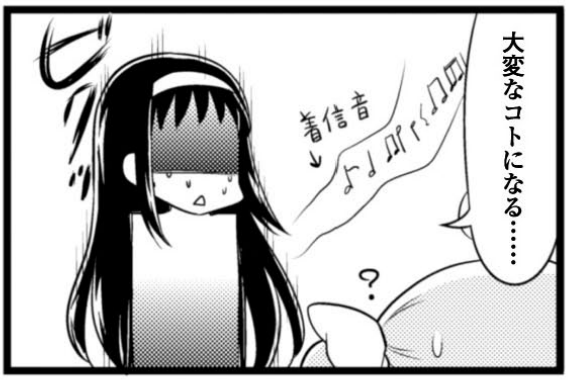
禍々しい生物の口車に乗せられてしまうと……

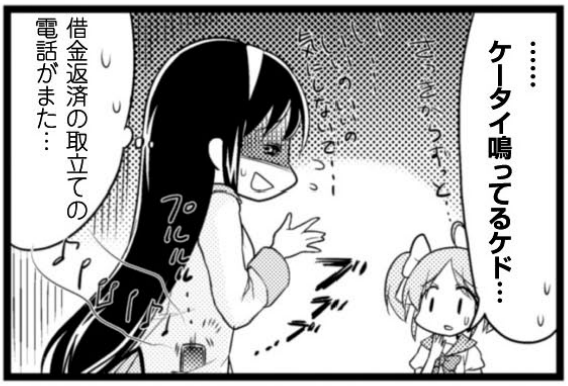
「以前会った、ような…」



漫画COMIC／嘉納(かのう)あいら

「それはとっても楽しいなって」





「もう何も恐くない」

小説 NOVEL／冬野ひつじ
挿絵 ILLUSTRATION／sasana
あと二人分の精液——
腰を振る捜査官に芽生えくる悦情！
THE DESIRE EXPRESS
欲望特急
スレイブバーサー 搾精捜査
【3日目　鳴室～朝比川】淪落軌道

■11：02 碧付近　渡嶋内客車通路

（ダメだ……身体に、力が全然入らない……ッ……）

青い列車は、秋晴れの空の下、色付いた田園風景の中を緩やかなカーブに沿いながら駆け抜けていく。広葉樹と針葉樹の入り混じった林は、赤、黄、緑と独特のコントラストを生み出し、深い陽射しを浴びて金色に輝くダケカンバとブルートレインの対比はとりわけ鮮やかだ。

しかし、今の理緒にとっては、車窓の外どころか手元のタブレットの画面すら目に入って来ない状態だった。

（鱗榮荘では九鬼に朝まで何度もお尻ばかり犯された……その後はコイツとまたソープの真似事をさせられて……それだけじゃない……はぁッ、北実駅に着いたらミニイベントがあるのに、こんなおぞましいオモチャまでつけられて……）

「どうしたんだ？　さっきからぼーっとしてるぞ？」

隣に立つ黒岩は、情交の熱がまだ引き切っていない理緒のくびれを、とぼけた顔で撫で回している。

「も、申し訳ありません……」

二人の立つ客車の通路に人影はない。

寝台列車の旅も三日目ともなれば、乗客達はミニツアーの合間を休息に充てるようになってくる。自室でこれまでの旅路を振り返りながら最後の夜をどう過ごそうかと思案しているのだろう、車内には、束の間の午睡にも似た寧静な時間が流れていた。

（人が少なくて良かった……でも、こんな事、じきに他の乗客達や乗員にも気付かれてしまう……）

次のミニツアーの内容を教えろと自分から言ってきた割には、黒岩は説明を全く聞いていない。タブレットを覗き込む振りはしていても、その意識は理緒の一挙手一投足に向けられているのがありありと伝わってくる。

「……ですので、パークゴルフをご希望の方には、マイクロバスをご用意いたしております。乗車場所は駅を出てすぐの広場になります……ん……ッ……」

所作を一つするたびに、下半身の違和感が理緒を苦しめる。

（こんなモノ履かせて、私が恥ずかしがる様子を見たいという魂胆なんでしょ……？　でもこのくらいどうって事は……くッ……ないんだから……）

スカートの内側にあるのは、ショーツではなく、陰部を覆う黒いラバーの貞操帯だった。陰毛を剃られたせいで肉花弁とラバーの生地がぴったりと密着し、汗ともつかぬ湿り気が太腿の辺りまでじんわりと広がっている。

（知らなかった……アソコって、こんなに熱いものなんだ……）

一度そう感じてしまうと、何をしていても秘部の熱に意識が向いてしまい、気が付けば内股気味で歩いているのだった。

股間の部分には鍵が掛けられ、指が二本辛うじて入る程度の穴が開いている。後ろは対照的にOバックのように大きく広がった穴が開いていて、歩いたり屈んだりすると珊瑚色の窄まりが顔を覗かせてしまうのだ。衆目の前で人知れず陰部を曝け出しているという異常な格好で、新人パーサーは客の手により、破廉恥極まりない痴女としてのデビューを密かに飾らされていたのだった。

（私の身体の隅から隅まで支配したいっていう事なの……悪趣味極まりない、最低の下種ッ……！）

怒りで打ち消そうにも、性を管理されているという実感は、揺れのたびに襲ってくる。

動いている車内で常に立っていると、予想以上に筋肉を使うという事も、初めて思い知らされた。高いヒールをこんなに心許ないと感じた事はない。

「これじゃ写真がよく見えないな……もっと拡大してくれ」

「はい……んあ……ッ⁉」

スカートの下に手を入れられ、腰を引く間もなく股間の穴から指が差し込まれた。

「ここの字も小さいんだよ、ピンチアウトしてくれないと……ほらこんな風に……ッ！」

更にもう一本指が押し入り、

「ひゃッ⁉」

クレバスを無理矢理広げられて、タブレットを取り落としそうになってしまう。

「んあ……ッ、い、今、拡大いたします……ッ！」

「なんだ、反応がイマイチだな……それともシェイクの方がいいのか？」

今度はそのまま二本の指で上下に激しく膣口を揺さぶられる。

「あッ、ひゃう……ッ！」

股間の穴から飛沫が腿を濡らすのを感じた瞬間、通路の自動ドアが開き、乗客が入ってくるのが目に入った。

（見られた……⁉）

慌ててスカートを直し、黒岩から身体を離す。

「あ、ちょうど良かった！　荷物が届いたんですけど、ウチのパーサーさんお使いに出てもらってるんで、代わりに部屋まで運んでおいてくれません？」

二十代後半の男性客は、すぐ目の前で繰り広げられていた卑猥な業務には全く気が付かないようで、一方的にまくし立てる。

「おやおやそれは大変ですね……ほら茨戸君、すぐに運んで差し上げなさい。私はラウンジで新聞でも読んでるよ」

黒岩は鷹揚に歯を見せ、理緒の腰をポンと叩いた。

（た、助かった……！）

「かしこまりました。只野様ですよね？　すぐにお運びいたします」

開いたままの膣口から蜜が垂れるのを感じながら、理緒は乗客の元へと駆け寄る。
専任パーサーの長く淫らな一日は、まだ始まったばかりだ――。
（やっぱり、少し休もう……頭がクラクラする……）
乗客の荷物を運び終え、理緒は客車には戻らずに乗務員車へと向かっていた。
ラバーゴムに包まれた股間はすっかり熱く、一歩歩くたびにヌチャヌチャと牝臭を放っている。
（このままなんて耐えられない……黒岩の機嫌を取って、なんとか外してもらわないと……それから九鬼のサンプルを今度こそ……）
ＤＮＡ鑑定のために収集しなければいけない精液は四人分、しかし先に収集した黒岩の精液は過去の検体と合致せず、小暮の分はまだ鑑定に出せていない。残るは九鬼と蛭間だが、九鬼には昨晩散々アナルを犯されただけで、採取ができないまま終わっている。今夜が鑑定のための検体を送ることができる最後のチャンス、失敗するわけにはいかなかった。
（いや、先に蛭間を見付けるべき？　鱗榮荘以来姿を見かけないけど、アイツからもなんとかして採取しなくちゃ……！）
「理緒ちゃん、客車はあっちだよ……こっそりサボるつもりかい？」
「九鬼様……⁉」
にやけた男の姿を発見した時、どうしてこんな所にいるのかと狼狽したのがいけなかった。
「この車両は乗務員用なんだよね？　誰もいないんなら入らせてよ……いいだろ？」
「あ、ここから先は……！」
しまったと思った時には、理緒は背中を押されるようにして無人の乗務員車へと連れ込まれていた。
「ハハッ、こういうのスリルがあって堪らないね」
「きゃ……ッ⁉」
仮眠室の二段ベッドの下段に押し倒され、身体が弾む。起き上がろうとした鼻先で遮光カーテンが閉められると、視界は瞬時に真っ暗になった。
「……あれ？　ここ、触ってないのにビンビンに立ってるよ？」
「んぁ……ッ」
男の息が胸の突起に吹き掛けられ、理緒は身体を震わせる。
（コイツ、夜の続きをここで始める気だ……！）
たったそれだけの刺激でも、黒岩の指で焦らされていた女芯は、愛蜜を溢れさせてしまっていた。
「こーんなに乳首尖らせちゃって、どうして欲しいのかな？」
「ち、違うんです……私は……」
（くッ……せっかく自分から網に掛かって来たのに、こんな貞操帯を見られたら面倒な事になりそう）
ぷっくりと立ったままのピンクの突起を指先で摘まれながら、理緒は必死に口実を探す。
（ここは適当にあしらって、手か口でなんとか……）
考えているうち、急に男の手が下腹部に下り、スカートの中に入り込んできて、そして――止まった。
「……え……何だよコレ……？」
読書灯の明かりが点けられた。
（まずい、見つかった……！）
理緒はシーツに手を突き、四つん這いの格好を取らされる。こめかみに冷汗が滲む。
「なんだよ……すっかり準備ができてたんじゃないか、とんだ牝ブタだな全く……」
白いヒップを包む黒い貞操帯、その中心部に開いた穴からは、ビーナスの彫刻のような完璧な曲線が強調された割れ目と、その間から僅かに覗く蕾が見えている。
「据え膳食わぬは男の恥ってヤツだしなぁ、仕方ない、食べてやるよ」
九鬼は理緒を見下ろし、顎を撫でながら笑った。
ドチュッ、ドチュッ！
「んふぅッ、ふッ、ふぅぅぅ……ンッ！」
「いいぞ……ッ、ンハァッ、ケツで咥えるの随分上手くなったぞッ！」
狭いベッドの上で重なり合っている乗客とその専属パーサー。その肌はピンク色に染まり、汗の玉をあちこちに浮かべている。
（あッ、あぁ、あぁ……ッ、昨日よりも深い所に届いてるッ！）
「ほらッ、こっち向けッ、どんな顔をしてるか見せてみろ！」
男が身体を前屈させる気配がして、理緒は顎を掴まれたかと思うと、
「んんッ、んーッ、むふぅぅッ⁉」
身体をエビ反りにされたまま、貪るようなキスをされ、
「んッ、キス好きだよなッ⁉　ケツマンコ、スゴイ締まってるぞ……ッ！」
ドチュ！　ドチュ！　ドチュ！　ドチュッ！
狙いを定めるようにした肉棒に、直腸を執拗に貫かれる。
（好きじゃないッ！　こんなッ、上も下もコイツの好きにされて……ッ、んはぁッ、奥ッ、抉られて……ッ、もう、ぐちゃぐちゃ……！）
アナルを串刺しにされながら舌までも犯されて、理緒の身体は唾液と腸液、そして夥しい量の愛液でずぶ濡れになっていた。
「じゅッ、じゅるッ、んちゅッ、むふぅ……ンッ！」
ベッドの軋む音も、もう耳には入らない。
（こんなところでッ、セックス……ッ、私、どうしてッ、コイツの言いなりになってるのッ……⁉）

著者近況　札幌市電は1910年開業の札幌石材馬車鉄道がベースになっています。設立者のひとり助川貞二氏の息子、貞利氏が札幌電気軌道時代に開発したのがササラ電車です。正式名称はロータリーブルーム式電動除雪車。長い！

挿入のリズムに合わせて男は理緒の口元まで身体を伸ばす。そのたびに、勃起は腸壁を深々と抉る形となり、理緒は喘ぎをキスで抑えるしかない。
「ぷはッ、お前、自分から舌入れやがって」
（違うッ、声が漏れちゃうから仕方なく……ッ！）
キスをしなければ喘ぎが漏れる。いつ、他の乗務員が戻ってくるかわからない。必死で首を伸ばし、男の舌を迎え入れるしかないのだ。
「んふ……ぅッ、んッ、じゅるるッ！」
（こんなのおかしい……ッ、レイプされてるのにッ、気持ちイイ訳ないんだから……！）
否定しようにも、髪を振り乱し、頬を真っ赤にして男の舌に吸い付く様子は、必死に快楽に堪えているようにしか見えない。そして、実際そうなのだ。
（こんなッ、締め切った所でシてるから……ッ、そう、酸欠でクラクラしてるだけッ！）
鼻から息を漏らし、咽び泣くかのような息遣いで、新人パーサーはアナルレイプの快感と戦う。
（息できないから、脳に酸素が回ってない……ッ、だから、感じてる訳じゃない！）
酸欠気味なのは九鬼も同じのようだった。
「アハッ、これ……めっちゃ興奮するッ！　腰が止まんないぞ……ッ！」
理緒の背に押し当てられた胸板は熱く、アナルを貫く肉槍は張り裂けんばかりに怒張している。
「んあッ、あ、あひ……ッ、も、もう壊れるッ！　お尻ッ、壊れます……ッ！」
バックの体勢になり、互いの早い鼓動を感じながら、性臭で満たされた暗闇で滅茶苦茶に腰を振り合えば、喘ぎが空気を湿らせ、カーテンを揺らす。
「ひ……ッ、ひぎッ、い……ッ！」
突き上げられるたびに、新人パーサーから呻き声が上がる。既に視線は焦点が定まらず、白目がちに変わっていた。
「いいねッ！　すごくいい……ッ！　もう普通のセックスじゃ満足できないだろッ⁉」
「そ……ッ、そんな……ッ、あひッ⁉」
男はピストンを続けながら、理緒の肥大したクリトリスへ指を伸ばし、器用に摘まんで扱き始める。
「ひぐぅ……ッ⁉」
理緒の身体が大きく跳ね、股間から熱いものが飛沫を上げた。
「あぅぅ⁉」
腸壁がギュッと締まったそのタイミングで、男は渾身の力で腰を突き入れる。
「んあッ、あ、あぁぁッ、んはぁぁ……ッ！」
息の混じった絶叫を放ちながら、理緒は肉槍の膨張を感じる。
（また、出される！　お尻の奥に……ッ、精子出されるッ！）
「イくぞッ！　ザーメンの味、ケツマンコでしっかり覚えろ……ッ！」
絶叫と同時に、九鬼の動きが止まる。そして、
びゅるる！　びゅる！　びゅるびゅるびゅるびゅる……ッ！
淫らに開き切った直腸の奥に、また新たな白濁が叩き付けられて、
「ひぐぅぅ……ッ！」
後ろに感じる熱い感触に、脳髄が焼き切れそうな快感を覚え、美麗捜査官は絶頂した。

■14：30　北実駅ホーム

「やっぱりこのスカートだと、上にコート羽織ってても、ちょっと寒いねぇ」
向日葵（ひまわり）の花のような完璧な笑顔を崩さないまま、彩夏（あやか）が隣でしきりにぼやいている。
「私、こう見えても寒がりなんだ。この時期に外に出る時はカイロとお友達で……あ、理緒ちゃんは大丈夫？　カイロ貼ってあげようか？」
「いえっ、私はこのコートだけで大丈夫です！」
理緒は咄嗟にコートの両襟を掴んで見せる。
「ほ、ほら、結構丈長いし、サイズもぴったりだから温かいと思いますよ……⁉」
「そ、そう？　ならいいんだけど……風邪だけは引かないでね？」
（危なかった……コートの中を見られたら大変な事になるところだった……）
渡嶋は交流会のために北実駅に停車中だ。交流会という名目は立派だが、親子連れとの撮影や、地元の有志によるブラスバンドの演奏といった、ささやかなイベントである。
（彩夏さんにああは言ったけど、風が冷たい……というより、アソコがスースーして集中できない……）
穿いているのが下着ではないというだけで、いつもよりも周囲の視線を感じ、朝から心音が高まっていた。それだけならまだしも、信じられない事に黒岩はセレモニーに参加する理緒に、コートの下は貞操帯だけで行くようにと命令したのだ。
（九鬼の精液はなんとか確保できたから、残るは蛭間の分だけ……早くしないと……）
アナルを犯した九鬼が、今回は思っていたよりも早く現場を離れたため、理緒はアナルに注がれた精液をそのまま収集することができた。残るは一人。
（だけど、黒岩のヤツ、貞操帯を外してくれるどころかこんな格好させるなんて……私、これじゃまるで露出狂じゃないの……！）
その後黒岩に呼びつけられ、言い付け通りに制服を脱ぎ、ブラジャーを取ってコートだけを着込んだ自分の姿は、一見しただけでは半裸とは分からない。だが、少し屈むだけで貞操帯の穴は外気に触れ、乳首は裏地と擦れて硬くなる。

著者近刊　二次元ぷち文庫にて『セレブ母娘飼育日記』『お嬢様パティシエ桜葉ユリカ　白濁のデコレーション』『美少女アイドル湯けむり旅呼ツアー』公開中、その他ノベルで『交配惑星　エイリアンに娶られし少女戦士達』なども！　好評発売中！

義勇軍への敵対を要求する男たちに捕らわれた
アウラ神国女王のシンシアとマリオンは――
魔剣士リネ2
乙女穢されし戦場
【第4話】勝利の果てに
原作／まくらカバーソフト
小説／酒井仁 挿絵／桐島サトシ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/